

# 鎖蛇の空

只のカカシBです

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世界には、戦闘機があつて、飛竜がいて、そして、戦争がある。

雷鳴のごときジェット排気、耳を劈く獣の咆哮、そこにあるのは正義などではない、ただ狩る者と狩られる者、喰う者と喰われる者、撃墜されればそのもの死、ただそれだけ。そのはずだった。

新たな脅威が現れたとき、暗闇に「彼ら」が蠢くとき、パイロットは、傭兵達は与えられた役目を、最後の権限を目覚めさせる――

## 目次

第一話：Flashback?	1
第二話：Viper ZERO Trial	7
第三話：父の面影	14
第四話：Mercenaries	20
第五話：Political Reverser—傭兵の役割と権限	26
第六話：The dragon killers	33
第七話：Emergency	39
第八話：Shot down the dragon	46
第九話：休日のお出かけ	53
第十話：休日の終わり	59
第十一話：飛行制限	65

## 第一話：Flashback?

「おー禄哉ーよく帰ってきたなー!」

駅の改札を抜けると、遠慮の欠片もない大声が俺を出迎えてくれた。帰って来たくて仕方がなかった故郷だが、帰ってくるとはこういうことだったと思ひ出す羽目になった。

「んな大声出さなくたって良いだろ、田舎の祖父さんじゃあるまいし。もうちつと静かに出迎えてくれ。」

苦言を呈したところで、いよいよ五十が見えてきたこの男は、お？悪いな、久々で顔忘れられてんじゃねえかと思つてよ、と朗らかに笑うばかりだ。

「ま、久しぶりに帰ってきたんだし、つれないこと言うなつて。取りあえず車乗れよ。」

早口にそれだけ言つて、有無を言わず俺のキャリアケースをひつたくつて意気揚々とロータリーに止められた車へ歩いて行く。やれやれ。

「しばらくぶりだけど、皆元気にしてんの?」

再会の定型句だが、情けないことにそれぐらいしか今かける言葉がない。まあ、この男については良い。三六五日いつ会おうが無駄に体力馬鹿だ。冬でも半袖で平然としているぐらい無頓着なのだから、今更再会の言葉一つそう気にはしないだろう。

「おお、誰もへばつちやいねえよ?お前が出てくちよつと前に入った整備士の鷹田なんか子供も二人できてよ、いっつも仕事の合間に携帯見ちやニタニタしてんだよ。子煩悩つて奴だなありゃ。」

その整備士の名は覚えている。大学の卒業も近くなつた頃に色々やらかして放逐されかけていた所を若手を欲しがっていた社長(このおっさん)が引つ張つてきた。前に会つたときは人生の終わりを迎えたような顔をしていたが、随分前向きになつたようだ。

「そっか、幸せな暮らしは手に入れたらつてことか・・・昔のことを思えばすっかり変わったな。」

「そうだな。つと、まつすぐ帰つて良いか?寄ることか。」

ハンドルを握ったおやつさんが思い出したように尋ねた。言われて考えたが、どこも今日行きたいような場所ではない。

「いや、いい。まっすぐ帰ってくれ。・・・悪いけど寝る。久々の都会でくたびれた。」

有無を言わずシートを倒すと、さつさと眠りに落ちた。意識を手放す直前、音量を絞らたラジオが四十年前のフォークソングをかけた。それが妙に懐かしかった。

目覚めたときには、古びた一軒家までたどり着いていた。四年前親父に連れられて出た、思い出の家だ。

「よく寝たなー。本当に疲れてたんだな。ま、玄関開いてるから先入ってる。」

時刻は午後八時過ぎで、向こうの駅を出たときはまだ明るさの残っていた空はすっかり闇に染まっていた。

「おい？寝ぼけてんなお前。飯食ったら寝られるように先風呂入っつけ。」

ぼんやり立っていると後ろから小突かれた。意識がはつきりしないので言葉一つ理解するにも時間がかかって仕方がない。

「ああ・・・ただいま帰りました。」

「おかえりなさいーい！あら碌哉くん、ちよつとやつれたんじやない？ま、上がって上がって。風呂沸いてるから先に入っちゃっても良いし！」

玄関に踏み込むなり奥さんがすっ飛んできてたたみ掛けるように言った。俺がやつれたと言うが、それは彼女の方に見える。

「お久しぶりです、お母さん。またお世話になります。」

「はいはい。久しぶりだからちよつと余所余所しいのは分かるけど、私たちはあなたの家のつもりでいるんだから、ソレは今だけにしてね。」

一応居候なのだからと礼儀を通したつもりだったが、少し呆れられたようだ。

「ま、良いからとつと入れ。荷物が片付かねえ。」

押し込まれるように家に上がり、居間に向かった。荷物はおやつさんが、部屋に放り込んでくると言って持って行ったので全くの手ぶらだ。

「もうすぐ飛鳥も帰ってくるから、それから晩ご飯にしようか。くつろいでて良いよ。」

飛鳥というのはこの家の一人娘の名前だ。親馬鹿が先か仕事好きが先かは知らないが、おやつさんの工場と同じ名でもある。時間があるならおやつさんの言葉通り先に風呂に入らせてもらおうかと思っただが、もうすぐということならそんな時間はなさそうだ。

「いま・・・高校三年？今年受験だっけ」

年齢を思い出しながら少し驚愕した。考えれば四年もここを離れていたのだからそんな年頃でもおかしくない。

「そうよ、やっぱりそんな反応になるわよねー。自分の子供だと言つと受験生？みたいな感じだけど、周りからしたらもう受験生、なのよね。」

そう感慨深げに言った後、あの子も「お兄ちゃん役」がいなくなつてからしばらく大変だったのよ、と電話で度々聞かされていた話をし始めた。こうなるともうただの思い出話だ。

「ただいまー！」

苦笑しかけたところに玄関から元気な声が響いた。もうすぐと言うのは本当に「すぐ」だったらしい。

「よいしょ。あ、ロッキー帰ってきてる。」

「お兄ちゃん」がいなくなつて半ベそかいてたと聞いていた割には、2,3日出かけていた家族が帰ってきたぐらいの調子だ。まあ、元気ならそれに越したことはないし、たかだか居候がいなくなつただけで大袈裟な、とは思っていたが。

「ただいま。四年ぶりだから開口一番でかくなつたなーって言ってやろうと思っただけど背丈そんな変わってないな。」

とか言いつつ、女子としてはかなり高身長の種類だが。確か170近かったはずだ。

「背丈はそんなに変わってないけど、ほら、女の子っぽくなつたでしょ

？惚れて良いよ？ほらほら。」

「はいはい、もうご飯だから早く着替えてきなさい。」

確かに女性らしくはなったが、中身が昔のままだなと苦笑していると呆れを全開にした声が遮った。

「なんか安心したな。皆いつも通りで元気そうだし。」

飛鳥に至ってはあるいは口も聞いてもらえないかもと思っていたが、そんなことも無く、一安心というところだ。

「・・・そうね、一番変わったのは緑哉くんかもね。」

虚を突かれて見返した、その視線の先。飾られていたのは一枚の写真。おやつさんとお母さんさん、そしてフライトスーツ姿の——俺の父。

—\*—

「パースワンからツー、ワンは南西からSA—3へ接近中。」

眼前には空へ向かって打ち上げられる対空砲火の光。俺は今から、あの怒り狂った重力と逆さまの鉄の雨の中へ飛び込んでいく。

『パースツーは見えている』

心強いことに僚機はこちらの姿を捉えている。差し迫った危険があれば彼が伝えてくれる。

「行くぞ・・・」

誰にともなく呟いて、翼下のマーベリックミサイルが捉えた映像をディスプレイに映し出す。その間にも数度、欺瞞のためにチャフのスイッチを叩いている。やがてディスプレイにミサイル発射機がはつきりと映し出され、発射スイッチに添えて指に力がこもる。

「パースワン、ライフルSA—3！」

マーベリックを発射し、すぐさま加速。チャフのスイッチを叩いて操縦桿を引き、機体をバレルロールさせる。後ろからミサイルは来ない。だが、レーダーは次から次へと危機を伝える。

「クソ、ディスプレイが2と3だらけだ。」

ディスプレイの一つを睨み付けて悪態をつく。2と3は発射機の

位置と種類を示す記号で、俺たちには3の方がより危険だ。

『パースツ―よりワン、ビンゴ、S A―3の破壊を確認。ストリートに武装トラックの一団を発見』

パースツ―は俺より対地戦闘に慣れていて、誰よりも早く破壊すべき敵を見つけてくれる。正直、ぺいぺいの俺より彼が指揮を執ってくれる方が良いのだが、当人は若い内に経験しろと言って取り合わない。

「まったく・・・どこにこれだけの武器を隠してたんだ？パースワンはビジュアル。」

『戦争を続けさせたい奴はどこにでもいる。パースツ―、ライフル、ライフル』

無駄口に応じながらも僚機は確実に車列を吹き飛ばした。爆発の威力を見る限り何かしら弾薬類を積んでいたらしい。

『ビンゴ、爆発を確認。』

声の代わりにカチカチとマイクを鳴らす音が返った。了解を表す信号だ。

「パースワンは真西のS A―2へ突入する。」

『パースツ―は見失った』  
フラインド

くそ。振り向けば見える位置を維持したつもりだったが、まだ感覚が甘いらしい。

『ああ、パースツ―はビジュアル。目標の北北東から支援する。』

位置を伝えようと口を開きかけた矢先に向こうが見つけた。それならこのまま攻撃できる。兵装を対レーダーミサイルに切り替え、低高度で接近する。

「マグナム・・・マグナムS A―2。」

ミサイル発射を確認してすぐさま上昇。だがミサイルの警報がない。

『目標を破壊。』

無線機の声はどこか釈然としない雰囲気を感じさせている。おそらく感じているものは同じだろう。

「ミサイルはどこに行った？」



『さて、な』

打って変わっておどけた調子だった。レーダー警戒受信機はミサイル発射機的位置を映し出しているが、ミサイル発射後に見える煙が一切ない。

「弾切れか？活動資金と物資の流れはほとんど切ってるはずだ。」

弾切れなら安全に攻撃できるが、それなら戦闘機より攻撃ヘリの方が手っ取り早い。

『現地軍のヘリ部隊に出動を要請するか？その方が後でミサイル代の請求が少なくすむ』

「・・・いや、まだ弾が残っていたら後々角が立つ。俺たちで破壊しよう。」

正直言つてヘリに出てもらうのが楽と言えば楽なのだが、SAMの排除のために雇われた以上はその仕事ぐらいは達成しなければ信頼を損なうことになる。

『了解』

残りのミサイルはそれぞれマーベリックミサイルが一発に対レーダムサイルが四発と対空ミサイルが二発。だが最後のは対地に使えない。RWRを見るとざっと十以上の目標が生きている。

「後は機銃頼み、か・・・。」

コクピットの中で独りごちて、せめて終わったとき自分の命があることを祈った。

## 第二話：Viper ZERO Trial

「……現実に起こったことだからって、夢で出てくることねえだろ……。」

起き上がったのは、昨日戻ったばかりの部屋に敷かれた布団の上。別に悪夢と言うほどではないから汗までびっしょりと言うことはないが、いまいち寝覚めが悪い。

「戦争屋共の戦争……か。」

昨年度中関わり続けた戦争。泥沼化の一途を辿り、傭兵達と大国の軍事力を飲み込み続けた戦地。

「……まあ、さっさと忘れちまうに限る。いよつと。」

ぼやけた頭を一つ振って、思い切って布団を跳ね飛ばした。

「おはよー」

布団を片付けてから、朝食の匂いにつられて居間に向かう。久しぶりといっても、やはり長年の間に染みついた習慣だ。

「はい、おはよう。朝ご飯、パンにする？米にする？」

「米が良い。今日いきなり機体飛ばすってことは無いけど、機体に慣れるのに色々やらなきゃならないことが多いから。」

パンの方が直ぐに力が出るのだが、いかんせん消化も早い。米の方が長く腹が持つ気がするのだ。何より長らく米に触れていなかったからしばらくは米を食べたいというのもあるが。

「はーい。じゃ、大盛りにしとくね。」

こちらに決定権はなかった。痩せの大食いを自負しているから完食する自信はあるが、成長期は過ぎているのだから少し加減してもらいたいと思わないでもない。

「お母さん、ご飯っ……あれ、ロツキー、あ、そうか帰ってきたんだっ  
た。」

バタバタと音を立てて飛鳥が居間に駆け込んでくる。時刻は七時半過ぎ、少し寝坊気味か。

「碌哉君のと一緒に用意するから顔洗ってきなさい。」

呆れ顔で言われて飛鳥が顔をしかめた。

「えー、抜きじゃ駄目え？」

「朝飯ぐらいちゃんと言つとけ。持たんぞ。」

中学生の時分、とんでもない寝坊を噛まして朝飯抜きで登校したことがあったが、空腹で死ぬのではないかというほどしんどい目に遭った。性別も年齢も違えど、それ以来飯抜きはおすすめしていない。

「ひゃー、お母さんが二人になっちゃったよう。」

などと言いつつ洗面所へ入っていく。誰がお母さんだ。

「碌哉君はそういうところ締まり屋よね。」

その背中を見送りながらおかみさんがからからと笑った。この四年で自分の生活はずいぶん変わったが、この家は相変わらずだ。元から、俺の今の仕事に近い仕事をしている家だからかもしれないが、何というか、落ち着いている。

「うひー、学校間に合うかな・・・」

洗面を終えた飛鳥が時計を見ながら席についた。

「大丈夫大丈夫。急いで食って五分までに支度して走っていけば遅刻で済むよ。」

「・・・え、間に合っていないじゃん。」

冗談のつもりで言ったのだが、それなりにキツイトーンで返されてしまった。

「でも、俺と同じとこだろ？歩いてても十五分で行けるじゃん。」

何ならこの家の二階から学校の時計塔が見えるくらいだ。そう遠い場所でもない。

「でもロッキー歩くのは速いからあてにならないじゃん。」

「流石に走ってる人間に勝てるほど速かねえよ。」

まだ何か言いたげな視線をその一言で封殺して味噌汁を啜る。目安の八時五分まであと二十分。さて、間に合ったものか。

「おう碌哉、準備できてるか？」

朝食を終えて、飛鳥を送り出すと丁度、おやつさんの会社の車がやってきた。このタイミングなら送ってやれたかとも思ったが、向か

う方向とは逆向きだし、個人の車でもないからそれは通らないだろう。

「あれ、飛鳥もう出たか？送ってやろうと思ったんだが。」

訂正、この親馬鹿なら個人でも公用でも気にしなさいそうさ。．．．だがまあ良いだろう、男だらけのむさ苦しいバンで送られるのも嫌かもしれない。

「遅れるつって走って出たよ。大体、この何もかもむさ苦しい車に乗せるつてのもどうなんだ」

乗り込みながら言い返してやると、違いねえと大笑して車を出した。

—\*—

「よお、帰ってきたな緑哉。よしよし、五体満足だな。」

到着するなり物騒なことを言ってくれたのは件の鷹田という整備士だ。当時は死んだ目をしていたが、それでも年の近い分幾ばくか気にかけてくれていた。

「そちらもお元気そうで何よりです。お子さんも生まれたそうで。」

返事をした途端、鷹田はふにやつと表情を崩した。

「そーなんだよ、もー可愛くつてさあ！あ、写真見る？生まれたてからこないだまでスライドショーにしてあるんだけど」

なるほど親馬鹿だ。おやっさんが連れてきただけはある。

「いえ、それは次の機会に見せていただきます。俺の機体見せてください。」

ここで、ちよつとでも弱腰な所を見せればそのまま子供自慢に発展するのは目に見えている。出来るだけ無感情に切り返して、取り出した携帯をしまわせる。

「そうか．．．じゃ、次の機会にするか。機体はこっち、格納庫の中だよ。」

少し残念そうながら、仕事をこなすつもりはちやんとあるらしい。指さした建屋の中へ入っていく。

「ある程度聞いちゃいると思うけど、結構特異な機体でね。整備やら部品調達の目処をつけるにも相当苦労したよ。」

そう語る視線の先に、これからの俺の乗機がある。

F-16のような胴体、斜めに突き出した双垂直尾翼、本来コクピット直下にあるべきはずのインテークは胴側面に二穴式で据え付けられ、排気ノズルも教導隊で見たモノとは僅かながら形状も長さも異なる。

「確かに聞いちゃいたけど、本当に奇妙な機体ですね。」

「そう思うよなあ。本当はF-2のRCS低減実験機として企業が独自開発して正規軍に提案するつもりだったらしいぜ。形式はF-2 ブライザー VZT。」

うんうん頷きながら、隣で機体の説明が始まった。心なしか声に呆れた色が混ざっているような気がする。

「ところが肝心のRCS低減が上手くいかず、予算も通らず、社内での扱いもぞんざいになって、当時子会社だったここに売り飛ばされたって訳だ。他にも色々あるんだろうけど、面倒くさそうだし知らない方がいい気がする。」

呆れ声になるわけだ。俺もそう思う。

「で、機体のことだけど、外見は見ての通り。RCS低減のためにはかなり工夫して改造されてる。後はインテークがあつたところにフューエルタンクが増設されたとか、STOL性能を考慮して推力偏向ノズルを採用したとか、そんなところ。」

成る程、あのノズル形状は推力偏向用か。だが、これに付いているということは気休め程度に考えた方が良さのだろう。

「火器の類いは？」

どれだけ機体がちゃんとしたモノでも武装がなくては戦えない。ここでの仕事を考えれば、対空火器は必須だ。

「安心しろ。実験機だがそこら辺は全部付いてる。使う機会はないだろうが、試作のAAM-5対応ランチャーまでな。それに、ほらコレ。」

話しながら機体に近づくと、コクピットに掛けてあつたヘルメット

を取り上げて差し出した。下から覗いてみると、バイザーには「Error」の文字。

ヘッドマウントディスプレイ  
「H M D . . . ! ?」

エラー表示は機体が起動していないからだだろうが、この国では正規軍でも未だ運用されていない代物だ。

「これも試作品。システムの方は完全な状態に近いらしいが、ディスプレイの方は未完成らしい。HUDも付いているから何回か使ってみて駄目そうなら普通のヘルメットに変えてくれ。」

性能は未実証のようだが、搭載されているだけでかなりの驚愕モノだ。

「こんなもんまで付いてて大丈夫なのか？俺傭兵なのに。」

「だから、親父さんお前にライセンス取らせたんだろ？札付きなら金次第で大抵の機体は乗れるからな。代わりに講習を受けて状況次第で守秘義務も課せられる訳だけど。」

そうは言っても、最新技術を導入した機体を所有するパイロットは限られている。よほど金持ちか、パイロットとして信用が高いか、良いコネがあるので無ければ手に入らないし、それが揃っていても軍の圧力を恐れて売り手が渋る可能性はある。

「大丈夫。データ取るためのテストパイロットつとけば誰も口出し出来ねえから！」

「まあ、そりやそうですけど。」

実際、届け出では、所有者は飛鳥技研。パイロットは傭兵の飛行隊所属で飛鳥技研への出向という形を取っているが、データ取得用の飛行は行わず、通常の任務に従事することになるのだから心理的に自身の所有機という意識は働いてしまう。考えればこここのところ「名目上」と言うことが多すぎる気がする。

「で、これ整備記録。登記するのにパイロットのサインがいるから。」  
整備ファイルをめくると、この機体がここへ運ばれてからの整備記録が全て閉じられていた。

「うわ、凄えハンガークイーンぶり・・・。」

七年近く全く動かされていない。だが、エンジンの不安はなさそう

だ。整備記録では僅か数ヶ月前にエンジンを搭載したと記載されている。

「エンジンはこの間モスボール？」

「そそ。んで、F-2のエンジンじゃなくてね、132の方。」

つまり、F110エンジンの129を機体に戻すのではなく、その改良型を搭載したと言うことか。ただ、見る限り機体重量の増加は避けられていないようだから推力としては元と五分五分というところだろう。確か微妙にサイズが違ったと思うがよく入ったな。

「はい、了解。」

記録と機体とを見比べながら項目を確認する。目視でどれぐらい分かるかと言われれば俺にはさっぱりとしか言えないが、目視でなくても同じことだ。

「うん、大丈夫です。」

一通り目を通してサイン欄に署名する。後はこれのコピーを持って所属する基地の事務室で機体の所属登記手続きをしてもらうだけだ。

「どーも、じゃ、コピー取ってくるわ。説明書の類はコクピットに置いとくから、待ってる間目通しといて。」

そう言つて鷹田は整備員の控え室へと消えていく。折角なので、言われたとおり説明書を見ることにした。

「大体は同じなんだろうけど、HMDとかどうやって使うんだ？」

知識程度に知ってはいるが、これまで見たことも触れたこともない代物だ。手をつけるなら先ずこれだろう。こう言っちゃ何だが、かなりワクワクする。

—\*—

「緑哉、コピーできたよ。書類持つてるよな？」

しばらくHMDと説明書とを交互に睨んでいると、コピー片手に鷹田がやってきた。クリアファイルには整備側の書類も一緒に入っている。

「大丈夫、持ってきてる。免許証やらと一緒にファイルに纏めてある。」

パイロットとしての基地要員登記は郵送とワイヤレスで済ませるがあるが、機体の登記は整備記録を自分の目で確認する必要がある。郵送不可ではないが、基地に隣接した格納庫を持つ飛鳥技研なら直に事務室へ赴く方が早い。

「そんじゃ、行ってくる。」

これを登記したら今週中には新しい機体での訓練を始められる。そう思うと、少しばかり足取りは軽くなった。



### 第三話：父の面影

「はい、千波さん。後の手続きはこちらで行います。お疲れ様でした。免許証はお返ししますね。」

事務の女性が提出した書類をデスクに置き、傭兵としての免許証を向こうから差し出した。

「ありがとうございます。」

それを受け取ろうとしたところで、ふと影が差した。

「・・・んん、千波緑哉？あの緑哉くん？」

横から別の事務員らしき初老の男性が書類をのぞき込んで、驚嘆の声を上げた。

「え、ええ、まあ。」

面識のない人物に話しかけられて思わず半歩後ずさるが、相手は気にした様子もなくニコニコと話し始めた。

「いやー、驚いたな。もうこんなに大きくなってたんだ。前にお父さんに連れてこられたときには僕の腰ほども背丈がなかったのに。」

こちらには覚えがないが、あちらは俺を知っているらしい。確かに、たまにレシプロ機の座席に座らされることがあったから、この基地に長くいる人からすれば偶に見る珍しい子供だったのだろうが。

「パイロットになったんだねえ。お父さん元気？」

困惑する俺を他所に男性はにこやかに次々話題を振ってくる。お父さん元気？か・・・。

「どうなんですかね・・・。僕を養成学校に放り込むだけ放り込んで雲隠れしましたし、今頃他のどのパイロットよりも高いところでも飛んでるんじゃないですか？」

すこしばかした言い方になったが、実際高いところにはいるだろう。あるとき突然ドッグタグが届いたから、無くした体の分軽いはずだ。

「そうかあ、どこにいるのか分からないんじゃないや心配だねえ。」

「・・・」

比喩は分かってもらえなかったが、まあ、それならそれで構いはし

ないだろう。俺だって紙封筒に入れられたタグと紙切れでしか死を知らないのだから。

「あ、あんまり引き留めちゃいけないかな。それじゃ、またね。」

「ええ、失礼します。」

相手の方から会話を切り上げたので、会釈を返してその場を立ち去った。

—\*—

「ねえ、ロッキーの機体ってどんなの？」

しばらく格納庫で機体について説明されたり相談したりした後、周りの業務終了に合わせて帰宅した居間で、唐突にそんなことを聞かれた。

「どんなのって……。」

なんと説明すれば良いのか、F-2をF/A-18に寄せたの？いや、形式は分かっているからもちろなかみ砕くべきか？

「基地で飛んでる細長いヤツ？」

F-104のことか。いい加減F-4に統一するかそれ以降の機体に交換すれば良いものを。

「いや、あれじゃなくてもっと新しいヤツ。写真見せた方が早いかな。元からこっちの世界に関心のある方ではない（持ってほしくもない）し、言ったところで伝わらないだろう。」

「はい、これ。」

愛用しているデジタルカメラに写真を表示させて手渡す。

「へー、見たことない機体だね。国防軍のにちよつと似てる？」

似てるというか、それを原型機としているが……まあ、それと見る人間はほぼいないだろう。詳しくれば詳しいほど尚更だ。

「で、何で？」

こんなことを聞きたがるのは珍しい。同級生に戦闘機マニアでもいるのだろうか。

「いやー、ロッキーのことだし、ちよつと知つときたいなーみたいなの

「？」

つまりどういうことなんだ。

「ん、これ何？」

カチカチと写真をめくる操作をしていた手が止まったのは、数少ない機体に寄って撮った写真。

「んー？垂直尾翼。」

「じゃなくて、このマーク。」

はぐらかす作戦だったが、相手に気づいてもらうこともなく破られてしまった。その写真に収められたのは、やや趣味の悪いものだから突っ込まれなくなかったのだが。

「パーソナルマークってヤツだよ。機体のあだ名がヴァイパーゼロだから、蛇と零の漢字を合わせたマークになってんだけど。」

「へー、ちよつと趣味悪いね。」

素っ気ない風だったが、かなりバツサリいかれた。かと言ってダメージがあるかと言われれば、自分の知らないうちに出来上がっていたマークだからそうでもないが。

「まーね、多少威圧感あるから良いけど。」

デザインしてくれた人には申し訳ないと思いつつ、ここはやんわり賛同しておくことにした。

「凄いいねー、こんなのが空飛ぶんだ。車よりずっと大きいのに。」

そんなことを言うと、旅客機なんかは修飾語にバカとつけて良いほどデカいが、それを言うのも野暮というものか。

「ほら飛鳥、もうご飯にするから着替えて来なさいよ。」

「はい、これ返すねありがとう。」

言うなり、ポンとカメラを放って寄越した。投げるなよ。

「珍しいわね、飛鳥が戦闘機の話に興味持つなんて。」

「何かあったのかな？」

尋ねては見たが、さあ？というように首を傾げられただけだった。

翌朝、向かったのは前日と同じくほぼF-2専用となっている格納庫。本来ここは滑走路に隣接した整備工場なので、整備の完了した機体は基地所定の格納庫へ移さなくてはならない。朝一でここに来たのはその作業のためだ。

「随分前に運び込まれたきり見なかったが、ようやく動かすときが来たってことか。」

感嘆の声を上げたのは牽引車を持ってきた基地の作業員で、口ぶりからしてここでの勤務は長いのだろう。

「やつとこさだよ。長いこと整備場一つ塞がれてたんだから邪魔で仕方なかったぜ。」

「好き好んで入れたのはあんたと千波じゃねえか。」

勤務が長い分顔も広いらしく、おやっさんと軽口を交わしては楽しんでに笑い声を上げている。

「父とも面識が?」

少し気になって尋ねてみると、怪訝な顔で見返された。

「おお?・・・あ、お前千波ん所の倅か! すっかりデカくなっちゃまったな!」

倅、とはなかなか古い言い回しを……。しかもバシバシ背中を叩いてくるからかなり痛い。

「そうか、パイロットになっちゃったか……。まあいい、しつかり頑張れよ!」

どこか含みのある言い方が気にかかったが、当人はさっさと牽引車に乗り込んでしまった。

「おい、おっさん、ついでに碌哉も乗せてつてくれよ。機体無くてコイツだけいたって仕方ねえんだから。」

「あ、そうか。ほら坊主乗れよ。」

酷え言われようだ。といって、しよげていけば構ってくれるような連中ではないし、構われたところで面倒くさいだけなので言われたとおり助手席に乗り込む。

「ほんじゃ、引っ張るぞ。」

牽引車に引かれて、じわじわと機体が前進し始める。

「もうちよい．．．もうちよい。よーし出たぞ。」

「碌哉、俺らここ片付けてからそっち入るから、格納庫で待つてくれ。ついでにこれ持つてっというて。」

鷹田が駆け寄ってきて頑丈そうな布袋を渡してきた。中身は簡易的な車輪止め一式。結構大事なもんを随分ギリギリに渡してきたな。

「うい、了解です。」

「おーい、離れてくれんと機体が動かせん。」

運転席から注意する声が飛んで、鷹田が慌てて離れた。

「よーし、行くかあ。」

気のない声を出して、牽引車が進み始める。ここから格納庫まで百mちよつとだから、格納庫まで一分ほどだろう。

「．．．お前の親父さん、出てくとき何か言つてたか？」

不意に神妙な口調でそんなことを尋ねられた。

「．．．いえ、特に何も。」

養成学校の前で「じゃ、頑張れよ」と言つて、それきりだった。これと言つた言葉を交わした覚えはない。

「だろうな．．．アイツは馬鹿だ。嫁さんが死んで、子供のために頑張ると言いながら、目ではいつも死に場所を求めてた。七年前にこの機体を置きにここへ来たときも、戦場のことばかり．．．そこを生きる場所にしていたと言えば聞こえは良い。でも、アイツは降りても良かったはずだ。」

長く秘めていた感情を吐露するような、あるいは悔いるような口調で続けた。

「．．．空を飛ぶつてのはアイツの理想だ。お前さんがその影響を受けてるのは重々承知してる。けどな、お前は取り返しが付かなくなる前に降りろ。親の後を追うことはない。」

言い終えると、機を後退させ始めた。そのまま、格納庫へ機体を押し込むと、一息ついて牽引車のエンジンを停止した。

「．．．おっさんの戯れ言だ。忘れてくれて良い。」

そう言つて帽子を深く被り直した。聞きに徹しようと思つたが、こ言われると青二才らしく一つぐらい言い返して置きたくなる。

「一つだけ。」

眩くと、相手の顔がこちらを向いた。

「俺は、父親を追うつもりはありません。俺は父親より優れたパイロットになる。父より長く飛ぶし、父より凄いと言わせて見せる。それが俺の夢ですから、それまで、降りるつもりはないです。」

子供の頃から持ってきた夢だ。高い理想があるのも、背負うものがあるのでもないから伏せてきたが、父親を知る相手なら多少子供っぽくても良いだろう。

「・・・そうか。」

彼は少し笑ったようだった。身内のことを他人に背負わせるのが嫌で言い返したが、正解だっただろうか。

「よし、牽引車外そう。手伝ってくれ。」

しばらく黙っていたが、意を決したように膝を叩くと、立ち上がって運転席を降りた。

「俺、牽引車外すの初めてですよ。やり方教えてください。」

「何い？親父さんならこんなのちゃちゃつと出来たぞ？仕方ねえなあ・・・」

そう言いながらも声には明るさが戻った。一つ自分の意思を通じたことは功を奏したようだ。

## 第四話：Mercenaries

「やーれ片付いた……。」

呻くように呟いて、鷹田が作業機に突っ伏した。F-2VZTの整備書類の整理やら、工具類の運び込みだのを怒濤の勢いで片付けたのだからそれは疲れるだろう。正直ここで手伝っているだけでも結構疲れた。

「お疲れ様です……。もう昼ですよ、どうします?。」

「ううーん……。」

水を向けられた鷹田がくたびれた呻き声をあげた時、ふと外からの声が耳を掠めた。

『——ここだろ、札付きなんだから。』

どうやら俺を探しているらしいが、声にはさっぱり覚えがない。それで、不意に悪戯心が働いた。

『よし、開けるぞ』

それが聞こえた瞬間、俺は戸を思い切り引いた。

「おわわっ!?!」

不意を突かれた二人組が泡食った声を上げて転がり込んできた。

「おう、誰か知らんがいらっしやい。」

声の大きさからして隠れる気は無いだろうし、それなら裏手でなく機体を入れた正面の方から来れば良いものを、よく分からん二人だ。

「あ……ども、初めまして……。」

わやくちやになりながら答えた片割れの顔にはでかでかとアレエ?と書いてあった。まさかバレないと思ったのか。

「お前ら。何やってんだ?。」

鷹田の方は二人と面識があるようだ。

「いやー、新しい機体が入ったって聞いたから見に行こうぜって言って来たんすけど……。」

ひどい目に遭ったあ、等と言いながら体に付いたほこりを払う二人。記章を見るに今年入ったばかりのパイロットだろう。何より学生らしさが抜けきっていない。

「見るのは良いけど、触らんでくれよ？まだ首飛ばされたか無いからな。」

「え、飛ぶの？」

何をそんなに不思議そうにするんだか。何のためにライセンス付きの傭兵がいると思ってるんだ。

「言つとくが、入るだけでも本当は良くない。普段一体どうしてるのか知らんけど、札付きつてのは守秘義務あるし、機体にだって管理、監視の義務が発生する。見学会とかで一般人にしょっちゅう触らせるからどこまでセーフか分からないけど、お互いのためにも普通は出来るだけ触れさせないのが不文律みたいなもんだな。」

ええー、としよんぼり肩を落とされてもこればかりは我慢してもらおう。そもそも、この二人の素性すらこちらは知らないのだから。いや、するとこのまま何も聞かずに帰すのもまずいな。

「碌哉、自己紹介かねて二人に案内してもらって来いよ。ここもう片付いてるし、鍵俺が閉めてくから。」

タイミングを見計らったかのように提案されたので、ここは完全に乗っかるしかない。

「そりゃ良いな。二人とも頼めるか？」

「もちろん良いぜ！俺たちも札付きの人と話すチャンスが欲しかったし。」

ということはこの基地にいるはずのもう一人の札付き殿は周囲と積極的にコミュニケーションを取ってはいないと言うことか。さもありなん。普通の傭兵は空飛ぶ走り屋、札付きはプライドの高いエゴイストと呼ぶ人もいる位だ。エゴイストとは言わずとも、プロ意識からか、何か原因があつてか普通の傭兵と話したがない札付きは一定数いるものだ。

そう考えながら、自機の奥に置かれた機体に目を遣った。自機ほどではないが、独特な機体。世紀が変わる直前、空の傭兵がその役目を果たすため導入した機体。F-15M。それを駆るパイロットがどんな人物か、近く知ることになるだろう。

「えーと、碌哉・・・だっけ、取りあえず飯行こうぜ？食堂まで案内す



るから。」

気遣わしげな声で我に返った。思ったより機体を凝視していたようだ。

「ああ、すまん。直ぐ行く。」

目の前にいない人間のことを考えても仕方が無い。まずはこの二人の話聞くことにしよう。

「そうだ、二人とも名前は？」

「あ、そっか、まだ言っていなかったっけ。俺は瀬田せだ 広翔ひろと。事業者用免許取ったばっかだし、基地入ってからまだ三ヶ月しか経っていないだ。」

ということは、大方大学へ行きながら休日を利用して資格を取得してきたというところか。最近では珍しい方だろう。最近の傭兵は新卒より社会人から夢を追ってくるパターンが多い。

「大北おおきた 海晴みはる。瀬田と同じで、大学行きながら免許取った。その代わり単位落としかけたけど。」

学生出身ならそれもまたよくあるパターンだ。免許を取ったは良いが留年してそのまま辞めて傭兵になる道を選ぶのもよく聞く話だ。

「卒業したなら偉いじゃないか。あ、俺名字教えてないか。千波緑哉だ。俺は大学も行かずに外国のフライトスクールに突っ込まれて、三年でいわゆるライセンスまで取った。」

その翌年、いきなり戦地へ行かされたのはとんだ誤算だったか。

「んん？ フライトスクールに三年？ 緑哉って何歳？」

やはり話さなければならぬらしい。

「あー、あんま話したくないけどさ・・・フライトスクール出た後、戦地に行ってた。授業とかで少しは聞いてるんじゃないか？ アラフティア”の紛争。」

その大陸はこの国から遙かに西南へ向かった所に浮かぶ大陸だ。ある大国の介入によって大陸規模で国家の基盤が崩壊した。

「で、そこで一年過ごして、こっち戻る前に四ヶ月くらい国防軍に機種転換手伝わってもらってたから、今二十一。」

因みに早生まれなので誕生日は一月だ。

「あ、じゃ俺たちと同じ年か。つか、結構スゴイ経歴なんだな。同じ年で戦争行つたヤツなんていないだろ？」

「凄い経歴、か。そんなに目を輝かせて言われても、あんな戦争に参加したところで誰にも誇れはしないというのに。」

「俺の知る限りいない。同期の連中はみんな普通の基地へ行つて、飛行隊ごとの教育を受けてる。．．．でもそれが普通だ。」

新人のパイロットなど、戦場に出たところで右も左も分からず撃墜されるのがオチだ。それでも俺が生き残つたのは貸し与えられた機体が対地任務に向いたトーネードで、僚機が経験を積んだ優秀なパイロットだったことが大きい。

「そっかあ。いやー、新米パイロットながら敵機を大量に撃墜したエースってカッコいいと思うんだけどなあ。」

残念ながら戦闘機が戦闘機を撃墜する時代ではほぼ無くなっていくんだが、まあ、ロマンの話をしているから無粋な真似はほどほどにしておこう。

「まあ、憧れるのは分かるけどさ。」

実際、戦闘機同士の撃ち合いになると幾ばくかの高揚感を覚えることはしばしばある。というより、そうでなくては軍人ではない自分が引いた引き金で相手が死ぬという現実に耐えられなかった。そういう意味では俺もエゴイストか。

「あ、見えた。あれがスクランブルの格納庫らしい。俺はまだ入ったことないけど、たまーに出動してる部隊じゃ対応できないって言うって出てくの見ることあるぜ。」

曖昧な返事ばかり返していたせいか、話題を変えるように滑走路脇の格納庫を指さした。

「へえ、ちゃんとスクランブルとかやってるんだな。」

基地や飛行隊によつては人員不足や年齢を理由にスクランブル待機を行わない方針を執っているところもあるため、多少なり余裕があると言うことだろう。

「ん、そっかあ、機体は？まだF-104光とか使ってるのか？」

昨日の飛鳥の口ぶりから勝手に栄光まみれだと思つたが、新人パイ

ロットの採用やスクランブルを行うだけの能力が残っているなら機体の更新があってもおかしくはない。

「いやー・・・半々？何か歳いった人は栄光に固執してて、そこそこ若くなるファントムとF-4より安いからって導入されたA-4とかになる感じ。」

「そうそう。栄光とかもうほとんど共食い整備らしいぜ？あの爺さん達いつまでやるんだろうな。」

やはり機体更新自体は始まっていたのか。しかし、三ヶ月そこらのパイロットに爺さんと呼ばれて嫌がられるとは、どういうパイロット達なのか。

「A-4か、操縦しやすいし運動性高いし整備しやすいし、導入するなら妥当なところだな。」

ライセンスを取るときに訓練で正規軍のA-4に追い回されたが、ほとんど太刀打ち出来なかったから栄光からすれば相当な発展だろう。

「そうらしいけどさあ・・・まだ栄光の爺さん達に勝てないどころか一人で操縦桿握ったこともないんだよ。」

何を当たり前のことを。

「まだ入って三ヶ月そこらだろ？俺、ジェットの乗り換えだつて練習機に一年近く乗ったし、フライトスクールで教官に勝てたのなんか最後の方に数回しかないぞ。」

しかもそのうち一回は、卒業目前に自信を持たせるためにわざと勝たせるという方針による勝利だから自慢にならない。

「げー、札付きでもそのレベルかよ・・・いつになったら勝てるようになるんだ？」

そもそも、事業用操縦士免許取得までの課程がほとんどレシプロ機なんだから、いきなりジェット機に乗せかえて操縦を一人でどうのこうのって言う方がおかしいんだが。

「さて、な。機体を意のままに操れるようになれば栄光ぐらい軽くあしらえると思うけど。」

まだ頭に入れるべきことが多い時期だろうからあまり深く考えな

いようにと思つて言ったが、訓練あるのみかあと肩を落とした。負け続けなら嫌気も差すだろうが、こればかりは耐えてもらうしかない。

「そういう禄哉は、機体何に乗ってるんだ？あれ、何か見覚えがない感じだったけど。」

そりゃ、そう思うよな。

「F-2の改造機。まだ飛ばしたことはないから飛行特性が分かんねえんだよな。」

正直かなり不安の方が勝ってきたが、資料を読む限り操縦感覚自体は大きく違うということはないらしい。

「え、それちゃんと飛べんの？」

「原型機で訓練は受けたし、機体も飛行実績はあるから多分大丈夫だけど、あとは俺の腕次第だな。」

と言いつつ、実戦でも目だった空戦があつたわけでなし、自慢するほどの腕があるわけじゃないが。

「そうかー、じゃ、初飛行楽しみにしとこ。」

勘弁してくれと思つたが、二人が楽しそうなので口に出すのは憚られた。指示書通りに行けば明日あたり訓練飛行をすることになるだろうから、せめて明日の好天を祈ろう。

## 第五話：Political Reverser―傭兵の役割と権限―

「着いた着いた。ここが食堂。食券式だから結構自由度高いよ。」

大北の言うとおりに、食堂の入り口には色とりどりのボタンが付いた券売機が据え付けられていた。

「ふーん、定食とかでその日のメニューが決まってるって所もあるのに珍しいな。」

大抵、メニューを増やすと仕込みの量が増え、食材が出きらなければその分ロスが出るというのを嫌っているのだろうが、ここはどういうシステムにしてるんだろうか。

「まあ、大半レトルトとか冷凍品とかでまかなわれてるから出来ることらしいけど。」

尋ねる前に答えてくれた。なるほど、確かにそれならある程度保管が効くし、近頃の冷凍食品は品質が高いから文句も出にくいだろう。

「なるほどね。自由度高くてそれなりにちゃんとしたものが出るんなら文句はないな。」

そうこう言う内に先に二人がさっさとメニューを決めたので、自分も目に付いたうどん定食に決めてボタンを押した。

「うどんかー。俺ら午後からまた飛ぶからうどんじゃ足んねえな。」

「そっちはそうかも知れないけど、俺こっち帰ってきてからまだうどん食ってないんだよ。向こうじゃ麺ついたら大体 Pasta だったし。」

そもそもそれも向こうの人間の味覚にあったものだから最初の内はかなりきつかったのを覚えている。

「あー、そっか。」

そういうつもりはなかったが、少し気を遣わせたようだ。

「あ、そうだ。俺先に席取っとくから盆任せて良い？」

思い立ったように瀬田が言った。確かに昼時で賑わい始めているから取っておいてもらった方が良さそうだ。

「分かった。じゃ、俺が持ってくよ。」

「サンキューー禄哉。んじゃ行ってくる。」

言うなり手近な四人がけのテーブルに陣取ると、三人分の水も汲みに言ってくれた。

「はい、カツ定とうどん定ね。」

そのうちに注文したものが出てきた。出来合いと言えば出来合いだからその分出てくるのも早い。

「よつと・・・あ、」

自分の食事を持って、こちらを振り向きかけた大北が不意に固まった。その視線を追って首を傾げると、壮年の男が目に入った。

「・・・。」

そして理解した。爺さんと呼ばれるパイロットが何故栄光に固執するか、何故若者から嫌われるか。その答えがパツチに刻まれていた。

— 1991 Political Reverser Cross  
s —

—\*—

この地において傭兵の役割は大きく二つ。一つはこの地への外部からの侵入を妨げること。もう一つは民衆の懐疑心の代理人となること。

その起源は一世紀も前にまで遡る。

その頃はまだ軍隊でも航空機は珍しい戦力だった。偵察の他これと言った役割は持たされていなかったが、パイロット達は誇りを胸に任務に就いていた。

だがあるとき、一部のパイロット達が戦火の最中に無闇な戦線拡大と侵略に反感を持ち始める。やがて彼らは国家の信条に反旗を翻した。そのときは第三勢力として。その結果、彼らの祖国は侵略には失敗したが彼らの誇りを掛けた行動により周辺国と平等な条約を結ぶことになる。

そして彼らは監視者となった。民間の中にあって戦力を有し、国家

の軍事行動に目を光らせた。

要員はそれだけではなかったものの、それから三十年ほどの間に彼らの仕組みは一斉に広がった。民間人の所有する軍事力、すなわち傭兵という形を以て。

それが生かされたのが、その頃に起こった新たな世界大戦だ。多くの傭兵達にとってそれは白人至上主義との戦争だった。

始め、その戦争は小国による侵略戦争だと見られた。だが、傭兵達の一部はそれが白人至上主義者らによって、有色人種の国を弱体化させるために仕向けられたものだど気付いた。そして、彼らは各地の傭兵達を集結させ、国際社会の新たな秩序を構築しようと奔走した。時に小国と大国の双方に刃を向け、民間人の保護にも努めた彼らの努力は、大国の指導者の失脚と、新たな国際体制の発足という形で決着を見た。

戦後、これらの功績が市井に広がると、傭兵は公のものと認められるようになり、安定した基盤を持つようになる。それは国際傭兵協会と名付けられた。れっきとした国連組織である。

大戦が終結すると、二つの大国エスマリとアイルナスがいがみ合うようになる。兵器開発競争が進み戦闘機は高速化し、高度なシステムを持つようになった。

困ったのは傭兵だ。国連組織として成り立ってはいいても、傭兵はあくまで民間のものという立場を取っていた傭兵協会は、国連の資金を傭兵達に利用させることを嫌ったため、傭兵達はこうした高度な戦闘機を維持、運用する資金及び能力を持たなかった。また、なにより新国連の戦時法の下では、傭兵達は国家に徒なすテロリストとして取られかねず、企業などの支援を受けられない可能性が危惧された。

そこで提案されたのが現代ではライセンスと呼ばれる特別資格を、基準をクリアした傭兵に対して付与する方法だった。これは戦時戦闘員資格と名付けられ、大戦での功績を無視できなかった国連によって承認された。

この方法の採用により、資格を得た傭兵は公的に企業の支援を受けることが出来るようになり、民間という立場を維持したまま軍への抑

止力であり続けられた。

それからしばらくの間、傭兵が軍に対して介入を行うような事態は発生しなかった。しかし、大戦から二十年ほど経過した頃にエスマリとアイルナスの軋轢が思わぬ方向へ飛んだ。エスマリから海を挟んで南西の小国で起きた国を二分する内紛で、アイルナスの関与が疑われたために、エスマリは小国について碌に調べもせずにアイルナスへの傾倒を防ごうと武力介入を始めた。始め、独立政権の保護という名目だった介入は次第に激化し、二大国共に無差別な破壊を招き始める。そうなれば、やはり傭兵も動く。

実際には、介入が始まった当初から不信感を抱いていた傭兵のとりまとめ役達は行動を始めていた。それが、当時まだ新鋭だったF-4やMiG-21への機種転換。強固な基盤を持つ正規軍に対抗するため、ライセンス持ち達の実力の平準化を図ったのだ。これは実際に功を奏した。

新鋭機で揃えられ、規律ある行動を示す傭兵の集団は前線の兵士に衝撃を与え、戦意を大幅に喪失させ、特にエスマリ側には介入戦争への疑念を抱かせた。そうなれば戦線は自ずと崩壊する。各所から方針の転換を迫られたエスマリはアイルナスの撤退を条件に軍を退き、当事国の内政はその国民に委ねられた。

しかし、傭兵の介入がなかったとして、エスマリが勝利できた可能性は極めて低いものだったという見解が示されるまで、傭兵達は小国の戦況の泥沼化を招いた張本人と扱われることとなった。

この事実が認められた頃から、傭兵は民間資本や自治体の協力を得て、軍事企業の生産レーンに自身等専用のレーンを設けておくようにもなった。

それから三十年ほど、傭兵の介入は行われなかった。その間に、傭兵達は民間軍事会社と同じように報酬を受けて各紛争などに参加するようになった。その頃には本来の役割は忘れられつつあった。

だがある時、再び彼らの時代が来た。

この地から西南へ飛んだ場所にある大陸、アラフティア。その大陸は大きな争いもなく、比較的平穏に発展してきた土地だった。



だが、ここでもエスマリはそこにある国々が強力な軍事力と強固な結束力を持つことを恐れた。

そこでエスマリは極秘に行動を始めた。その活動が表に出たのはアラフティアの主要国とエスマリが、自国民同士の行き来を可能とする条約を結んだ時だった。

当然、この条約について何ら不審な部分があったわけではないが、過去のエスマリの行動、侵略パターンから、猜疑心の塊とも言うべきほどの状態になっていた傭兵のとりまとめ役達は、この時点で警戒を始めた。

結果から言えば、その警戒は的中した。エスマリは、自国民がアラフティアで一定の信頼を得るようになると、工作員を使い彼らを操り、アラフティアの市民を戦争へと先導させた。そして、紛争がアラフティア全土へ広がるのを見るや、自国民の保護を名目に戦争へ参加した。

それは国際社会からの批判を招いた。当然、傭兵の出番だった。警戒もしていた。だが、傭兵は出遅れた。

三十年前の介入での経験から、最新鋭の機体を使用し、能力を平準化することを優先した傭兵達はしかし、当時エスマリ空軍の実験機だったF-15S/MTDの能力をフィードバックした機体、F-15Mの製造に、それまでの機体とは違った操縦系統、それらを習得するための訓練に時間を取られ、ようやく体勢を整えた頃にはアラフティアの基盤はほとんど破壊されていた。

しかし、エスマリはそのままアラフティアにいくつかの拠点を設置する動きを見せていたために、傭兵には未だ介入の余地があった。そこで傭兵達が執った方針は、エスマリ本土への侵攻だった。アラフティアの為に手薄になっっている本土のエスマリ軍基地を攻撃すれば、軍を引き返させざるをえなくなるかと考えてのことだった。

実際に引き換えさせることには成功した。しかし、それが想定よりも早かった。エスマリは本土防衛に当たっていた部隊に余力を残させたまま、アラフティアから引き上げてきたエース級部隊と交代させ、更には敢えて本土近くへ引き込む戦法を採用するようになった。

そこで問題になったのが、同じように引き上げられてきた地対空ミサイル<sup>S</sup><sub>A</sub><sup>M</sup>による攻撃だった。傭兵達が主に装備したF-15Mは高空での優位を獲得することを優先しており、対地能力に優れているとは言いがたかった。そのために空戦の最中に低空域へ迷い込めば、途端に無力なのも同然になっていたのだ。

考えあぐねた傭兵は、禁忌的とも言える行動に出た。

それが、今もライセンス持ちとそうでないものとの間に長期に渡って尾を引く問題を発生させた。

〃一般傭兵による対空陣地制圧作戦<sup>ワイルドウィーブル</sup>〃

ライセンス持ちは上空のエスマリ空軍機を排除し、一般傭兵は対空ミサイルを沈黙させる。三十年前の紛争への介入でエスマリが用いた戦法を、傭兵が用いようとしたのだ。刻々と進む戦況の中で下せた判断はそれだけだったのだろう。

だが、一般傭兵の使用する機体はとうに陳腐化したF-104などのセンチュリーシリーズに、引退したライセンス持ちから譲渡されたF-4世代の機体が関の山。ワイルドウィーブル装備など持ちようがなかった。当然、すり潰されるように傭兵達が消えていった。美談のように言うなら、それがライセンス持ちを奮起させた。

エスマリ空軍機を確実に高空へ釣りだし、各個撃破する戦法を定着させた。アラフティア大陸で成果を上げたエースが瞬く間に姿を消した。そして民意が傭兵を支えた。エスマリ国内で起こったデモが軍事企業の生産レーンを封鎖させ、エスマリ政府に戦闘継続が困難であることを悟らせた。

やがて、アラフティア崩壊に関する資料が暴かれると、傭兵達への支持は高まり、こうした傭兵達による正規軍への介入は“Political<sup>ポリティカル</sup>Reverser<sup>リバーサー</sup>”と呼ばれるようになった。直訳すれば政治的な逆噴射装置、すなわち政治的な抑止力であると言いうことだ。

しかし、傭兵間ではライセンス持ちとそうでないもので大きな対立を招いた。戦闘への介入を行うか否かはライセンス持ちによって決められる。つまり、一般傭兵からすれば、ライセンス持ちが始めた戦

争のために、多くの友人を失ったということだった。  
以来、当事者だった傭兵達の間には互いに険悪な雰囲気が続いている。

## 第六話：The dragon killer s

つまりは、この年齢を重ねたパイロットはそのワイルドウィーブルの犠牲者だったかも知れないということだ。それで、ライセンス持ちについて信頼できる連中ではないと吹聴しているのだろう。

「おう若いの、ライセンス持ちだってな？またどつかで俺たちを駒のように使い捨てようって考えてるのか？」

その言葉に、ある種乾いた感想さえ抱いた。典型的な男。表だって何か具体的に意見するわけでなし、過去の遺恨だけにしがみついている。

「・・・好き好んで戦争に参加しようって質じゃない。すり潰されて死にたいならアラフティアへでも行け。傭兵嫌いのエスマリの脱走兵共がまだ居着いてるはずだ。」

アラフティア崩壊はまだ片付いてはいない。ライセンス持ちや政権交代したエスマリの各軍がアラフティアに居着いた傭兵や脱走兵を掃討に乗り出しても、アラフティアの生活圏にまで入り込んだ全てを片付けることは出来なかった。アラフティア大陸の各国がようやく落ち着きを取り戻し、自国の軍を再編し、何とか収束の目が見えてきたという所だ。

「へっ、聞いたかよ。俺たちを使い潰すだけ使い潰したライセンス持ち様は俺達がどつかで野垂れ死ぬのがお望みだよ。」

実際そうしてくれれば面倒がなくて良い。ああでもしなければ傭兵は敗北し、エスマリは幅を効かせ、今こうしてこの老人達が戦闘機で自由に飛ぶ空はなかったのだろうから、ライセンス持ちとしても、一個人としてもあの判断はある程度理解できる。反面、彼らにとってライセンス持ちのために戦争に巻き込まれて起きた悲劇だという認識も非難できない。実際彼らを殺したのは民意の代理人であったライセンス持ちの判断だったのだから。

とはいえ、やはり同じライセンス持ちとしてここで彼らの高圧的な態度に同情を示すことは出来ない。

「そう思ってくれてもいい。だが、俺達がいつまでもいがみ合って協

調を失えば、死ぬのは更に力の無い一般市民だと言うことを忘れてもらつては困る。・・・そうだろ？「ドラゴンキラー」。」

老齡のパイロットは舌打ちをした。彼本人の渾名や部隊名ではないが、このような基地に所属する傭兵パイロットはその役職からこう総称されている。ライセンス持ち批判に執着していようがそれへの矜持は忘れないはずだ。

「言うことはいっちょよまえだな。おい、新入り二人、気をつけろよ。ライセンス持ちつてのは自分たちの目的のためならお前等のことだつて後ろから撃つてくるぞ。」

また随分と使い古された脅し文句を言うものだ。大体、後ろから撃つのは裏切り者のすることだろう。やるなら正面から撃つ。

「その認識で結構・・・。不安ならいつでも二番機として後ろに付いておくことだ。」

言つて振り返ると、二人が所在なさそうな表情を浮かべて立ち尽くしており、周囲の年上の人間が意味ありげな笑いを浮かべている。大方、敵の敵、といったところか。

「悪いな待たせて。」

「え、ああ、うん・・・。」

努めて負の感情が出ないようにしながら、席に着くと、戸惑いながらも二人もそれに倣つた。

「あ、あのさ、さっきのつて・・・。」

どちらかと言えば当事者に近い以上、気にするなどは言えまい。しかし、俺が話せばどちらかに偏つた印象を与えることになる。

「うん・・・、悪いけど先輩パイロットから聞いてみてくれ。俺から話すともまた爺さん方がうるさそうだから。」

なおも食い下がろうとする気配は見せたが、爺さん連中と目が合つたらしくそれ以上の追求はなかつた。

—\*—

昼食の後、何となく気まずいまま二人はブリーフィングがあると

言って隊舎代わりのプレハブ小屋へ行き、俺は俺で格納庫に戻ることにした。

「お、戻ってきたか緑哉。」

戻るのを待っていたかの様な口ぶりだ。そう思つて機体の方を振り向くと、そこに工具箱に腰を掛けてF―2を見上げるパイロットがいた。

「稲佐<sup>いなさ</sup>さん、コイツが千波緑哉です。」

鷹田の呼びかけに、稲佐と呼ばれたパイロットが振り向いた。

「初めまして、千波です。TACネームは“Rock er”。」

「稲佐<sup>もとい</sup>紀だ。TACネーム“Hopper”<sup>ホッパー</sup>。よろしく頼む。」

握手を交わして、一瞬だが相手を見定めるように互いに互いに視線を合わせる。少しばかり堅物のような印象だ。そして不意に、稲佐がF―2に視線を戻した。

「この機体、まだ飛ばしたことがないんだったな。」

少し目が険しい。だが当然だろう。慣れない機体に乗るパイロットと組むのは不安なものだ。

「ええ、そうです。・・・機体に慣れるにも、なるべく早く飛行実績を作っておきたいんですが。」

この基地に札付きは俺以外には今日の前にいる一人だけ。エレメント（二機一組の編隊）を組めるのも当然この一人だけ。ここで、印象を下げるわけにはいかない。

「そうか・・・Rock er、午後少し付き合え。」

「・・・？」

意図を掴みかねてしばし沈黙した。

「初飛行なら随伴機がいた方が良く。今から新米つれて他の連中が上がるから、それが行くの待って飛ぶぞ。」

それは予想だにしない話だった。随伴機を務めてくれるのは有り難い。だが、訓練での飛行はフライトプランの提出が義務づけられている以上、今すぐは無理だ。

「い、いや、しかし、俺は今日フライトプラン出してません。今から飛ぶのは不可能です。」

慌てて止めようとしたが、稲佐は面白がるように目尻を下げて口を開いた。

「大丈夫だ。鷹田さんに頼んで二機分フライトプランをねじ込んである。」

「な、」

驚いて鷹田を振り返ると、スマン、というように手を合わせられた。いや、いつそ有り難いが、業務的に大丈夫なのかソレは。

「気にするな、フライトプランなんか普通は基地側の人間が提出するものだから。鷹田さんに代わりにやってもらっても同じだ。」

「なるほど、それなら・・・あ、それだと基地の許可は？」

基地も傭兵用のものとは言え公的な機関だし、なにより滑走路の使用にはタイムスケジュールがあるだろうからフライトプランがあるからと言って勝手に使われては困るだろう。

「それも、元々俺が訓練で使う時間、大本を質せば札付きが大勢いた頃の名残で札付きの時間になってるから問題ない。」

何もかも都合の付く日と言うことか。

「了解しました。準備してきます。」

以前の飛行隊に比べれば固め、という印象は変わらないが彼も優秀なパイロットらしく柔軟性がある。

—\*—

「俺たちが使う訓練空域は一般傭兵のとはずらされてる。途中まで同じ経路を通り、北へ転進して百五十km進出する。そこで動作チェックをする。それが完了したら、訓練部隊の帰投を待つて基地へ戻る。」  
机に広げた空域地図を指し示して稲佐が飛行計画を説明する。これから向かうのはいくつかの島が点在する「見通しの悪い」空域だ。「了解。」

現時点で、基地から編隊長資格を与えられているのは彼の方、つまりここでは俺は基本的な僚機だ。相手に付いて飛ぶことになる。

「よし、行くぞ。訓練の連中も大分向こうへ行っただ頃だろう。」

稲佐が席を立ったので、それに付いてミーティングに使った部屋を出る。外では、整備士達が機体を並べ、準備を完了させていた。飛行前に渡されるリストを確認しながら、搭乗し、準備を整える。

「こんなにバタバタして初飛行することになるとはな。頑張れよ碌哉。」

「ええ、どうも。まあ、都合の良いときに、なんて言ったらズルズル先延ばしにしかねないからこのぐらい強引で良かったですよ。」

少し感謝の気持ちを伝えると、鷹田は、なら準備した甲斐があったよ、と言つてコクピットを離れた。

『Rocker、準備良いか?』

通信機から稲佐の声が聞こえる。ここからはパイロットだけの世界だ。

「Hopper、オールクリア。いつでもどうぞ。」

言つて、早く行こうと急かすように手信号を送つてみる。風防の向こうで稲佐は少し笑つたようだ。グッドサインを返してくれる。

『よし行くぞ。』

その言葉に呼応するように、F-15が動き始める。追つて、F-2もブレーキを解放。滑走路へと機を動かす。

滑走路の端へ来ると、稲佐は管制と短く言葉を交わした後、エンジンを吹かし始める。飛行前の安全確認だ。それに倣つてこちらもエンジンの推力を上げる。異常はない。互いに確認して、先にF-15が離陸滑走に入る。上空から無事に離陸するか確認するためだ。

『よし良いぞ。上がつてこい。』

号令を受け取つて、スロットルを押し込み、ブレーキを解放。離陸滑走は僅か数秒、瞬く間に晴れ上がった空へ舞い上がった。

『無事に上がったな。合流して編隊を組め。』

「了解。」

形状が違う分、やや操縦感覚にズレはあるが、直ぐに慣れることが出来るレベルだと判断し、稲佐機の後方へ付く。

『左に旋回する。』

ブリーフィング通り、東へ進路を取り陸地の外へ向かう。それから



しばらくはまつすぐ飛ぶだけだが、このまつすぐ飛ぶという事自体が始めの頃は難しかった。いくら推力が大きかろうと、いくら制御システムが優れていようと、それで横風の影響がなくなるものでもない。つまり、自分ではまつすぐ飛んでいるつもりでも、受けた横風の分だけ本来自分が飛ぼうとした直線のラインからは、ずれが出るものなのだ。あの二人もあの様子では、それを考慮に入れて飛ぶことはまだ出来ていないだろう。

『Rock er、俺たちの大陸を見たことはあるか？』

不意に、稲佐が尋ねてきた。

「ありますが、子供の頃で操縦桿は父親が握っていました。」

それはまだ父親がここの基地に所属していた頃、レシプロ機の前席に乗せられてそれを見たことがある。ただ無心になれる圧倒的な雄大さで、いつまでも魅入っていたのを覚えている。

『そうか、もうすぐ端の稜線を通す。今度は自分の力で見てみる。』

「了解。」

稲佐の言葉通り、眼下を山の稜線が通り過ぎ、その瞬間底の抜けたように宙空がぼっかりと大きな口を開ける。

内陸に住んでいればまず目にするこのない景色。人が住むところより低い場所を覆い隠すように、ヴェールのような白い雲がどこまでも広がり、ごく稀に垣間見えるその下は人の生存を許さぬ極寒の世界。いつか、父親に連れられて見た浮遊大陸の世界を、今は自分の力で飛んでいた。

## 第七話：Emergency

『懐かしいか?』

しばらく雲と陸地の世界を見回していると、そんなことを聞かれた。それから考えてみたが、懐かしいという感覚ではない気がした。「懐かしい・・・というより、感動が強いです。自分の手でこの空を飛べるのは感慨深いですから。」

フライトスクールの訓練は全て内陸、ないしは内海でのことだったし、アラフティアとの往来は旅客機だったしで、今まで一度も自力でこの空を飛んだことはなかった。そういう意味で、この感動はひとしおだった。

『そうか。だが、いつまでも眺めている余裕はないぞ。間もなく旋回ポイントだ。』

その言葉で頭をコクピット内に引き戻す。この先で北へ転進していよいよ訓練空域へ到達する。訓練中に射ベイルアウト出することになっても帰れるように陸地がそれなりの数存在する場所か、大陸の近くが選ばれているという。

「現段階で飛行系統に異常なし。問題なく試験に移れます。」

『了解。』

返答の後、F-15が旋回を始める。見失わない角度を維持しつつこちらも旋回に入る。横を向いたコクピットから真っ白な雲の海が見えた。

—\*—

『——左へ。』

数度目の号令に合わせて操縦桿を傾ける。ここまでに旋回飛行、エロンロール、ループと複数の機動を行い、今はバレルロールを試しているところだ。機動を終えると、計器類に目を走らせ、異常を知らせるようなものがないか調べる。

「異常なし。」

『外部からも確認できない。次は・・・クライムロールで行こう。』  
「了解。」

クライムロールは上昇しながらバレルロールの様なロール機動を実施する課目だ。整備が正しく実施されているかを見る試験飛行では、出来る限り負荷の高い上昇や大きく機体を揺さぶるような機動を繰り返す行う。

「異常なし。スプリットSでの降下を試みる。」  
『了解。』

ペダルを操作し、180度ロール。続けて操縦桿を引き、降下に入る。ここである程度ピッチ角をちゃんと取っておかないと、雲の海に突っ込んだり、地面に突き刺さったりする羽目になる。

「異常なし。」  
無事にスプリットSを終え、定型の報告をする。ここまでの機動では異常が見られない。

『外部も異常なしだ。大抵の機動はこなせるようだ。フルアフターバーナーも試しとくか？スピードブレーキの効きも知っておいた方が良いだろう。』

フルアフターバーナーと言うことは音速を超えてみるということだ。音速を超えると減速するのが面倒になるのだ。とはいえ、これは試験飛行でかつ編隊長の指示とあらば嫌と言うわけにはいかない。

「了解。」  
『何だ、音速飛行は慣れてないか。』

稲佐が珍しいものを見るように笑った。  
「去年一年戦場にいましたが、対地任務が殆どで音速飛行する機会がなかったのです。」

一応、それより後に国防軍での訓練で音速突破をさせてもらう機会はあったが、音速飛行中は機体がまともに動かなくなるため正直超えたくない。

『じゃ、なおさらだな。どのみち耐久試験もかねてやっとなきやいけないんだからやってみろ。』  
「了解。」

とはいえ、音速を超える瞬間は楽しいものだ。自分が作り出した衝撃波に機体が乗り上げた時の不思議な振動を感じたり、音速の壁がゆつくりと後ろへ動いたりするのを見ると、普通では見ることが出来ない景色を見ていると実感する。

「行きます。」

音速を超えるには周囲になるべく影響を出さないように、高い高度を飛ぶ必要がある。それだけの高度を稼ぎ、推力を上げていく。目指すのは大体M1.2〜1.4くらいになる。

『良いぞ。そのまま加速しろ。』

仮にこちらでトラブルが発生しても回避が出来るだけの間隔を空けて、F-15が斜め後方を追従してくる。通信の間にも速度計はM0.9を示し、更に数字を大きくしていく。

その瞬間が来たとき、機体がボワツと何かに乗り上げたように揺れた。

「音速を超えた。」

速度計がM1を超えた値を示し、超音速飛行に入ったことを知らせた。

『よし、良いだろう。減速しよう。』

少しの間音速で飛び、稲佐の言葉で推力を下げる。とはいえ、それだけでは速度が落ちないため、スピードブレーキを開き、僅かに上昇角を取る。

『Rock er、上がりすぎるなよ。俺に付いてバンクしろ。』

音速飛行は雲海や地面に影響を与えないように高高度で行われる。今回もそうだ。つまり、下手に上昇角を取り過ぎると、通常のパイロットスーツでは耐えられないような高度まで一気に上がってしまう。そこで使うのが、バンク角を取りながら降下するという手段だ。「了解。」

降下すれば運動エネルギーが増加するように思うが、ここまでの高速になるとむしろ減速する。それに加えて、バンク角を取ることによって揚力を下げ、速度を落とすのだ。

『リカバリ。』

しばらく降下し、テストを始めたときの高度、飛行速度まで戻ってきた。

「いずれも異常なし。」

コクピットの計器はいずれも正常な値を示している。整備にも機体そのものにも問題はなさそう。

『HMDはどうだ?』

質問にしばらく沈黙した。好奇心故に勢い余って装着して出てきたが、正直使いづらい。理由は明白なのだが。

「・・・ヘルメットバイザーを数値が行き来するのは楽しいんですが、俺にとっては結構邪魔ですね。なにより、俺の頭に合わせて作られた訳じゃないのでぐらつきますし、AAM-5とかAIM-9Xとかの使用が前提になつてるらしくて、AAM-3とかだと照準が上手く行かない感じがします。正直、宝の持ち腐れなので外した方が楽な気がします。」

『ああ・・・そうか。』

稲佐も稲佐で残念そう。とはいえ、俺では使いこなせないし、サイズがあつてないからそのうち支障が出るだろうし、外すほかないだろう。

『まあ、機体もパイロットの腕も心配はなさそうだな。一戦交えてみるか?』

言葉の端に隠しきれない闘志が滲み出た。これは受けない手はない。

「是非とも。空戦には不慣れな部分もありますから経験は積んでおきたいです。」

『よし、良い返事だ。じゃあ——』

条件を伝えようとした稲佐の無線に他の無線が割り込んだ。

『緊急、訓練中の部隊が飛竜に襲われている。コールサイン Backpack。支援可能な部隊は即刻向かえ。繰り返し——』

飛竜・・・傭兵の存在が許されるもう一つの理由。本来の生息地を

離れて人間の生活圏に迷い込む彼らに対処すること。それが傭兵に与えられた役割。内紛にも関与するライセンス持ちに対して基本大陸の外側でのみ戦うためドラゴンキラーと呼ばれる一般傭兵達。

『はぐれか……。巣を作っていると厄介だな。後から別の飛竜が居着きやすい。』

稲佐が独りごちるように無線を飛ばした。機体は既に彼らの訓練空域の方へ向けられている。

「巣があるならそこを飛び回ればヤツの気を引けませんか？」

『良く分かっているじゃないか。今日は俺たちもまともな兵装なんか積んでないからな。いきなり空戦に突っ込むよりそっちの方向で行かせて貰おう。』

昔、父親が話していたことが役に立った。飛竜は縄張り意識が強く、群れ同士の戦いで共食いをして命を繋いでいると言われるほど、周辺の生物との衝突が絶えない。それを利用する。我々がはぐれ飛竜の巣を突けば飛竜は血相を変えて飛んでくるだろう。後はいかに俺が引きつけて稲佐が撃ち落とすか、だ。

「俺は丸腰ですから、引きつける方は俺が。出来るだけ早く撃ち落としてください。」

F-2は増槽ドロッパタンクを外したきり装備はなくなり、F-15は翼の下に二本ばかりぶら下げたAIM-9のみ。あるだけマシという状態だ。『ああ、分かった。ところでRock er、お前、所属は飛鳥技研だよな?』

「え?ええ、そうですが。」

いきなり何を聞き出すのだろうか。

『よし……。』

そう言ったきり、稲佐は管制と通信を始めた。

『Rock er、現時刻を以てコールサインを使用する。コールサインはASSROCK1及び2だ。確認して復唱しろ。』

趣味の悪い!と叫びかけたがそれは飲み込み、通信を繋ぐ。

「ASSROCK2、了解。」

傭兵でも本来はコールサインを使う。しかし、飛行隊に所属する機

の数があまりに少なかったり、臨時編成でかつ知り合い同士ならTACネームのみで呼び合うこともある。今日はそのパターンだったが、戦闘に参加する上で不都合だと判断したのだろう。だからといって所属組織の名前とTACネームを組み合わせてコールサインにする、しかも読みはどこぞの対潜ミサイルと同じと来た。

『もうすぐ連中の交戦区域だ。』

その言葉に続いて、通信を繋ぐ音。

『ASROCK1、HopperよりBackpack1へ。支援に来た。アイツはどこから来た？』

問い合わせに、数度ノイズが返った後、ようやくパイロットが声を聞かせた。

『あつはは、こりゃあ・・・ライセンス持ちさんが助けに来てくれるとは心強いな。』

声は少し若い。食堂で笑っていたパイロットの内の誰かだろうか。

『ヤツの反応を最初に探知したのはブルズアイの十五で八十。巣があるのかはるばるどこから飛んできたのか・・・うおつと！』

ブルズアイは作戦空域等において目印となる地点で、その後の十五はブルズアイから真つ直ぐ北を向いたときに十五度角の方向にあるという意味。八十は距離で、基本単位はkm。

「ここからならそいつが飛んできた方が近い。」

だが、本当に巣があるかは分からない。

『Rock er、そこらの島を回り込んでアイツにレーダーが当たりそうな角度から進入しろ。』

稲佐もやはり飛んでいったのでは間に合わないと判断したようだ。つり出せるかどうかには掛けるしかない。

「了解。」

飛竜が住処とするのは入り組んだ岩場だったり、風の通り抜ける谷だったりする。そういう形状の島を探して飛び回れば良いわけだ。

『良いぞ、そのまま真つ直ぐ。』

それらしい島に目星をつけて旋回。機首を戦闘空域に向ける。

「掛かってくれよ・・・。」

祈るように呟いた瞬間、通信機がノイズ混じりの音を吐いた。  
『ASROCK、ASROCK！そっちに敵が向かった！』  
獲物が掛かった。



## 第八話：Shot down the dragon

推力を上げ、レーダーに映った敵と正対する。怒り狂った羽ばたきが俺を狙って疾駆してくるのがはっきりと分かる。

『Rock er、飛竜の攻撃は強烈な音波攻撃だ。食らえば機体の部品が共振してバラバラに吹き飛ぶ。空気の薄い高高度につり出せ。』

有り難い忠告だ。戦闘機の部品を共振させるほどとなると人間も無事では済まないかも知れない。

「了解。」

今や飛竜ははっきりと目視できる距離まで来ている。その口が開かれる寸前、スロットルを空け、操縦桿を引き、急激に機体を上昇させる。

『がっちり食いついてるぞ。直線的に動くなよ。』

そんなことは百も承知だ。飛竜と一直線に並ばないよう機体をロールさせ始める。飛行試験で行ったクライムロールだ。

「Hopper、どこにいる？」

『飛竜の少し下。追いかけて上昇してる。いよいよ頭に血が足りてないらしいな。こっちに気付いてない。』

飛竜も生物である以上、体液の流れがある。それが戦闘機を追い回すような速度とGで動けばどうなるかと言えば、当然頭に血が行かなくなり判断力が鈍る。まして耐Gスーツだのそれに近い身体構造だとかいったものを持たなければそれは顕著になる。

「クライムロールを終了してマイナスGで判断能力を奪う。後は頼む。」

『了解。』

機動を長く続けると高度が上がリすぎる上に機体の運動エネルギーも失われる。このあたりが頃合いだろう。

機体を切り返さないように水平に戻し、上昇をやめる。飛竜が付いてくるのを確認し、即座に反転降下。

『ロックした。だがギブアップらしいな。』

振り返って探すと、飛竜はゆっくりと錐もみしながら落下していく

ところだった。

「仕留めるんですか？」

ほぼ確認だった。我々は騎士ではない。正面切つてぶつかり合うより、巨大な力が市民の生活を脅かすことがないよう、確実に脅威を排除することを優先する。だから、ここで飛竜を追い討つ事は確定事項と言える。

『ああ。ホワイトアウトしたただけなら凍死する前に復活するかもしれない。確実な手を取るさ。』

落ちていく飛竜を追つてF-15が降下する。弱った飛竜を追う姿は、手負いの鳥を捕り食らう鷲のようにも見える。その目が、飛竜を捉える。

『FOX2』

F-15の翼から空対空ミサイルが飛び出す。ガラガラヘビの異名をもつAIM-9だ。

やがてパツと火薬の花が咲く。飛竜が残っていた揚力を失い、急激に落ちていく。しみ出しては共に落ちていく紅い飛沫しぶきが、ひととき雲に色を着け、やがて消えた。

「飛竜の撃墜を確認。」

見届けて一番機に報告を上げる。

『こちらでも確認した。Backpack1、そちらは全機無事か？』  
『ああ、助かったよ札付きさん。あの短時間でやつつけるとは、やっぱり腕が違うんだな。』

通信相手は手放しに賞賛を送ってくる。やはり、昼間の爺さん連中とは随分当たりが違うようだ。

『なに、そっちだって撃ち落とされずによくやってたじゃないか。札付きでも翼なりエンジンなりに被弾するヤツはいるのに。』

稲佐も褒められるだけは性に合わないらしく、相手のフォローに入った。

『だがBackpack1、ゆっくり話してる暇はないんだ。巢の掃除をしなきゃならなくてな。』

巢の掃除というのは、戦闘が始まる前に言っていた、一度飛竜が棲

むと、その後も飛竜が居着くようになるという話からして、巢があった島をどうにかしようと言うことか。

『巢の掃除はこつちがやる！お前等は黙って帰つとけ！』

不意に通信が割り込んだ。よく見るとF-104が接近してきていた。あからさまな喧嘩腰は気分の良いものではない。

『そっちの機体・・・ふん、稲佐か。姿は見せんくせに機体ばかり飛ばす燃料浪費人間が、今さらマトモなパイロットの振りか？』

エマーゼンシーコールが出てから十分は経っている。今更ノコノコ出てきて言うのが難癖とはどういう神経なんだ。

『おー、爺さんあんたか。何、新しい機体も導入できたのに、未だに栄光なんか乗ってるって聞いたから、ここじゃ燃料の無駄遣いが仕事なのかと思つてたぜ。』

稲佐は稲佐でそんな姿勢は分かりきつてるとでも言うように自分への嘲弄を受け流し、口撃を始める。

『何だと・・・！我々は誇りをもって栄光を使つとるんだ！お前らにとやかく言われる筋合いはない！』

声を荒げる相手パイロットに稲佐はつまらなそうな声をだした。

『ふーん、誇り、ねえ・・・。あんたらが出てくるまでに十五分そこそこ掛かっている。飛んでくる時間を含めても遅すぎだ。それに加えて立ち上げの遅いエンジン。何分立ち上げに掛けてる？それがどれだけスクランブルに影響する？手前の我儘でトロい機体を使って、チンタラ出てきて、味方のパイロットが死んだら仕方ねえってか。今日のことだつて若いパイロットを見頃しか。そんで誇りだと？同じ穴のムジナだな、え？ドラゴンキラーさんよお。』

いらだちをぶつけるように次第に声を荒げる稲佐。『同じ穴のムジナ』という言い方からして、自分らへの不満をぶちまけるだけの一般傭兵の姿にはうんざりしていたのだろう。

『何を・・・！』

栄光のパイロットはまだ何か言い返そうとしたが、それは言葉にならなかった。それを見計らったように新しい通信が入る。周波数からして管制塔か。

『ハリス、リード、もう良からう。稲佐のようなライセンス持ちは、基地全体の能力を向上させる為に、こちらが頼んで在籍して貰っているパイロットだ。お前達の気持ちは分からんでもないが、これ以上は堪えろ。いがみ合うばかりでは残るものも残らんど。』

少なくとも管制塔に普段いる人間ではない。それに言動からして大分上の役職のようだ。

『う……。了解……。』

俺たちとの調子ならまだ何か言っただろうが、どうやら余程頭が上がないか、信頼しているのか、しよぼくれながらも素直に従った。『すまないな稲佐君。彼らの態度にせよ、運用にせよ、落ち度は私にある。かつて彼らを説得できなかった為に、今のパイロットにまで禍根を残す事になってしまった。』

過去に何があったのか、管制塔の男はただ悔いるようにそう言った。

『事情は承知しています。だが、私は若者が命を落としかねない状況は看過できない。・次から我々がスクランブル待機に入ります。』

実質的にF-104パイロット達への戦力外を通告しろと要求しているようなものだ。しかし、意思確認なしで“我々”と言うあたり稲佐もまだ頭に血が上っている。

『・・・帰投する。Backpack、先行しろ。我々は君等の着陸を確認してから着陸に入る。』  
『了解。』

しばらく身の置き場に困っていた訓練部隊が機体を翻していく。その隊列の後方へ加わるように機を動かす。

『ASROCK1、Hopper、大丈夫ですか?』

編隊の後方で機体を安定させた後、稲佐に通信を繋ぐ。言葉こそ頼もしかったが、頭に血が上っているのはどんなミスをしてかすか分からない。何かしら頭を冷やして貰うための手立てが必要だ。

『ASROCK1、大丈夫だ。大分頭も冷えてきた。あー・・・Rock er、悪いんだがスクランブルの経験はあるか?』

ようやく、俺のことに思い至ったらしい。まあ、有る無しに関わら

ずやらされることにはなるのだろうか。

「アラフティア時代に何度かあります。空戦もそのときに。」

その時に求められたのは正規軍と同等の五分以内での離陸。単発で起動の速いF-2なら三分そこそこで上がる自信がある。

『そうか。・・・すまない。』

安心したように一息ついた後、今度は詫び始めた。

「気にしないでください。彼らに任せてはいつか死人が出る。多少なりとも他の傭兵達が命を落とすリスクを下げられるなら喜んで協力します。」

答えを聞いて稲佐は満足げに頷いたようだ。低く、穏やかな声が通信機から帰ってきた。

「おお祿哉、無事だったか。」

駐機場で出迎えてくれたのはやはり鷹田だった。

「いやー、機体のテストだけのつもりがなかなかとんでもない目に遭いました。」

つくづく空では何が起こるか分からないものだ。それでも、気付かないうちに曳航していたデコイがきれいさっぱり消し飛ばされる空よりはマシだったが。

「そりやそうだよな。そもそもここいらつてそうそう飛竜が来るような空域じゃないし、今日はツキがなかったな。」

鷹田は笑っているが、武装なしで戦闘を行うのは肝が冷える。レシプロ機だの旧世代のジェット機だのに比べればかなり優位に立てるが、どのみちまともに攻撃を食らえば助からない。

「確かにツキはなかったが、腕は確かだったぞ。伊達に戦場をくぐり抜けてないな。」

隣にやってきて賞賛をくれたのはやはり稲佐だった。

「戦場と言っても、随分相手が違いますよ。前は火薬入りの電柱が音速でぶっ飛んでくるSAM陣地で、今は・・・」

そう言いかけて、自分が出そうとしている言葉は、今の戦場の方が楽だと言っていると捉えられかねないものだ。と気付いて目を泳がせ

た。

「ま、SAM陣地に比べりゃ簡単な戦場だな。相手の目の前に出たが最後だが、逃げ回ってりゃ相手が勝手に息切れするし、そうなりゃこっちから一方的に撃って終わりだ。俺だって最初はそう思った。」

言葉に困っていると、稲佐が笑ってそう言った。だが、最後の言葉からして簡単なばかりではないのだろう。これは、心して掛からなければ命はなさそうだ。

「おい、あんたらASROCKのパイロットだろ？さつきは助かったぜ。」

不意に声が掛かり、振り向くと訓練に出ていた部隊らしい飛行服を着たパイロットだ。

「そういうアンタはBackpackの隊長さんか？よく新米つれて帰ってきたな。」

いち早く稲佐が応じた。尋ね方からして、F-104のパイロットが言っていたように普段から一般傭兵との関わりを絶っているのだろう。その割に気さくに応じているが。

「まあ、戦闘中だと新米は乗ってるだけで操縦するのは俺だからな。」  
「それでも複座の後席から操縦するのは楽じゃないだろ。アンタも撃墜されなかつただけだったもんだ。」

稲佐はあくまで相手を持ち上げる。

「アンタ方みたいなの腕の良いパイロットに褒められると嬉しいね。ジイ共はくさすだけくさして褒めもしなけりゃ、どこを直せとも言いやがらねえ。」

気を良くしたパイロットは次いでF-104のパイロット達への文句を言い始めた。

「鬱陶しくて仕方ねえなそりゃ。で、いいのか？俺たちと話してると爺さん共がまたへそ曲げるだろ。」

「曲げたくて曲げてんだから曲げさせときゃ良いんだよ。どうせ、もう何年もしないうちに引退なんだから。」

余程ストレスなのだろう、言葉に遠慮がない。ついでにとつとくたばりやがれとまで言い出しそうな勢いだ。

「おい、リーダー戻ってこーい」

「いけね、デブリーフィングか。そんじやまた。」

呼ばれて、パイロットが慌てて向こうへ走っていく。その姿を見送って稲佐がぽつりと呟いた。

「・・・面倒な連中がいなければ、彼らにも教えられることがいくらでもあつたな。」

## 第九話：休日のお出かけ

「緑哉、HMD外すって?」

基地で戦闘報告書を製作して帰り、今は夕食の後。新聞片手に親父さんがそんなことを聞いてきた。戦闘後、鷹田に次回以降は通常のヘルメットを使うと伝えたことを聞いたのだろう。

「外すって、丸ごとオミットする訳じゃないけど、ヘルメットのサイズが合っていないし、照準出してみたけどやけにぐらつくし、HMDで照準するような兵装は積まないだろうし、って思うと普通のヘルメットの方が楽だなって。」

昼間、稲佐とも話したことだ。結局、今のところHMDに対応した兵装がないため、HMD越しにHUDでミサイルの照準を行うという、馬鹿馬鹿しい事になっているから、無くても同じだろう。

「そうか・・・サイズもネックか。んじゃ、いつか使うってなったときに大丈夫なように再調整できねえか検討しとこう。」

「そうしてくれると助かる。」

俺もライセンス持ちである以上、ポリテイカルリバーサが発動されればまた実戦に参加する。その時、また新型機が与えられるか、F-2を使うか不明だが、後者なら武装は最新鋭のものを使用できる可能性は高い。ならば、HMDの調整はやっておいて損はない。

「他は不調とか無かったか?」

訊きながら、その声には不調など起こりえるはずがないという自身が滲み出ていた。

「まあ、エンジンの慣らしが要る以外に不調らしい不調は無かったよ。」

エンジンは新品のものが搭載されていた。恐らくどこかの部隊がF-16Eの導入か、F-16の換装用か何かで一斉発注したときに一緒に発注したのだろう。傭兵の使用機体を整備する工場では珍しいことではない。

「そうか。なかなか運良く新品のエンジンが入ったからな、すっかり慣らしてやってくれよ。」



「そうするよ。」

今日は予想外の敵襲があつたため慣らし飛行まで出来なかつたが、次の飛行で慣らし運転を終えたいところだ。あまりのんびりすると、スクランブル待機に着くようになってからでは自由に飛べなくなる。

「ねえねえロツキー、明日って休み？」

話が一区切りしたと見て取つたか、飛鳥が新しい話題を振つてくる。明日は日曜日、休みは取ろうと思えばいつでも取れるが、二人しかいないライセンス持ちがバラバラに休むと編成上都合が悪いため、休日は稲佐と合わせられている。

「休みだね。別に基地に行っちゃいけない訳じゃないけど。」

何ならフライトプランを提出して滑走路の使用許可が下りれば飛行も出来るが、それをすると整備士に嫌がられるためわざわざやろうとは思わない。

「じゃ、明日どこか出掛けよ？」

どこかに出掛ける。世間一般の日常生活から長く離れていた身としては随分と懐かしい響きだ。因みに出掛けたいかどうかは別問題だったが拒否権はなかつた。

「それじゃ、一日子守よろしくね。」

翌朝、そんな言葉と共ににこやかに送り出される。子守と言うほどの歳か？

「もー、子守じゃないって言ってるのに。」

「・・・ま、いちいち言い返すあたりまだまだ子供か。」

「あー！ロツキーまでひどい！」

そんな叫びを横目に、奥さんは含み笑いを残して玄関の中に戻り、飛鳥はふくれっ面。思わず頬をつつきたくなるが、あまりからかうと怒られそうだ。

「さて、行きますか？」

顔をのぞき込むと、むくれたまま歩き出す。こういう性格は昔のままで、少し安心した。

「そう言えば、ロッキーって彼女とかいたことあつたっけ？」

様々なテナントが軒を連ねるショッピングモールを歩きながら、不意に飛鳥がそう尋ねた。随分なキラークラスだ。

「ないよ。」

モテたモテないではなく、学生の頃は他人の恋愛様子を眺めたり、少しばかりの手助けをしたりするのが気楽で良いと考えていたから、恋人を作ろうと思ったことがない。そもそも相手から願い下げだつたのかも知れないが。

「そっかあ、ロッキーモテるタイプだと思つただけだなあ・・・。」

何故そんなに残念そうなのか知らないが、向こうの見込み違ひだつたという他あるまい。

「それはそうと、そっちこそたまの休みくらい友達とか、いるのか知らないけど彼氏とかと出かけたりしないのか？」

彼氏がいるとしたら奥さんが一言二言何か言つてきそうなものなので恐らくいないのだろうが。

「彼氏はいない。友達もまあ、大事だけど、ロッキーは本当にいつ一緒にいられるか分からないでしょ？たまの休みだからロッキーと遊びに出掛けるんだよ。」

なるほど、俺は思いのほか大事にされているようだ。

「ありがとな。」

思わず、目線より下の頭をなでると、にっこりと言うよりニヤつとした顔で振り返つた。

「ふっふーん、私の優しさに気付いちやつた？そんな飛鳥ちゃんに思わず惚れちゃつても良いんだよ？」

「はいはい、そういう冗談は良いから。」

飛鳥の頭に乗せていた手を離し、先へ歩き出す。

「あ、ひっどーい！けなげな女子高生の心は傷ついたよ？」

心を傷つけられた女子がそんな物言いをするものだろうか。

「はいはい。もうすぐ昼だし、どこかでパフェなり何なり奢つてやるよ。」

「やったー！さすがロッキー！」  
なんとも現金な……

それから暫く飛鳥の買い物に付き合ったり、食事に行ったりした後、本屋に向かった。

久しぶりの祖国の本屋をあつちへこつちへと見ていると、ある雑誌の表紙に妙な既視感を覚えた。

『傭兵基地に未確認機体！シルエットからF-35ではないかとの憶測も!!』

吹き出しこそしなかったが、頭を殴られたような（マンガでガン！と擬音が付くタイプの）衝撃を受けた。表紙には更に、『早くも飛竜と交戦か!?!』などとも書かれている。

「どしたの、ロッキー？」

ようやく見慣れ始めた景色を表紙に据えた雑誌を前に暫く固まっていると、飛鳥が寄ってきた。

「いや、これさ……」

そう言つて雑誌を見せると、神妙な顔になって暫くその表紙を見つめた後、あつ、と手を打った。

「おー、ロッキーの機体？……何で？」

それは俺も聞きたい。

「うーん、俺の機体ってかなり特殊仕様で目につくし、いつも基地の周りにいるマニアたちに抜かれたかな……あ、抜かれたって、写真撮られたって意味な？」

ついでに基地の誰かに話しかけて行動についても何かしら憶測を立てたのだろう。

「へー、やったねこれで有名人だよ！」

何も嬉かねえ。

「別に顔撮られた訳でなし、有名ってほどじゃないだろ。」

「ふーん……これって大丈夫なの？」

何が、と聞き返し掛けたが、そもそもこつちが何を言わんとしているのか伝わっていないのかもしれない。

「いや、ゴシップ雑誌の類いじゃなくて、航空機好きの人たちが情報を集めたかったり共有したかったりして出す雑誌だから、問題じゃないよ。ただ、こうも早く出てくるとは思わなかったっていうだけ。」

記事化の速さが朝刊並みだ。興味を引きそうな話題だから情報が入るなり記事を差し替えたのだろうか、中を見ると、数日前に基地内を動いていたとか、昨日飛んだとかいった情報がやや素人風の写真とともにちまちま乗せられており、後はF-2、F/A-18、F-35の情報に終始している。

「まあ、ついでに言うとな実験機自体は色んな会社がつては傭兵にも性能試験を依頼してくるから、傭兵業界全体で見ると俺みたいなのは珍しくないんだよ。だから興味は引いてもゴシップ化することはないよ。」

何か事故なり問題なりを起こさない限りは、だが。

「そうなんだ。じゃあ、これは買って帰ってお父さんとお母さんにも見せてあげよつと。」

そう言うなり、飛鳥は俺が手に握っていた雑誌を取り上げてカゴへと放り込んだ。

「それは良いけど大分買い込んでるな。」

カゴの中の大半は流行り物の漫画本で、何冊か勉強用の本が混ざっているようだ。

「いやー、本屋さんってなかなか来ることないし、友達とじゃあんまり沢山買えないからつい欲張っちゃって。」

気持ちには分からなくもない。俺も学生時代は色んな本を買いあさっていたものだ。外国へ行つたところで連載系のものは電子書籍に切り替えるか、追えなくなってしまうから今日は殆ど本を買っていない。

「まあ、漫画でも何でも活字を読むつてのは良いことだからな。」

「えへへ……。ロッキーは一冊？」

飛鳥が取り上げたのは『飛竜のすべて』と書かれた本。

「一応、敵のことを知る事位は出来るだろうから、こつちの本へのリハビリもかねて買っておこうかと思つて。高校まで読んでた本は絶版

になるか連載終了で書棚になくてさ。」

敵について知るなら基地の資料室の方が詳細に分かるが、そこから資料を持ち出すことが出来ないの、この手の本も外で情報収集をする上で重宝する。

「そつかあ、知らないうちに終わっちゃうって何か寂しいよね。」

「まあ、いまどき多少は電子書籍で追っかけられてるから、それほどじゃないよ。それより、買うものそれで全部か？」

尋ねると頷いたので、カゴを受け持ってレジへ向かった。まあ、仮にもこっちは社会人なので、支払いはこちら持ちだ。

「あ、ごめんロッキー、お花摘みに行つて良い？」

長らく東洋人と関わっていなかったせいで意味が分からなかったが、しばし後その意味するところを思い出した。

「ああ、行つといで。荷物は持つところ。」

飛鳥を見送つて、今日の買い物に目を落とす。服飾品やらお菓子やら雑貨やら本やら、去年までの何を手に入れるにも苦労した時期とは大違いだ。

と、そこへ不意に影が落ちた。

「・・・禄哉か？」

怪訝な声に顔を上げると、そこには白基調の服に黒縁眼鏡、学者然としたという形容詞の似合う男が立っていた。誰か、などと記憶を探る必要はなかった。

「おお、はると遥人か。久しぶり。」

自分でも驚くぐらい平凡な再開の挨拶で、それでも高校時代からの親友の呆れたため息にすら安心感を覚えた。

## 第十話：休日の終わり

「碌哉・・・お前なあ、こっちは人違いかも知れねえってビクビクしながら話しかけてんのに何だよその一週間ぶりくらいに会った友達に向けた挨拶みたいな返事は。」

呆れた顔にまくし立てる口調、それに触発されてとうとう自分の間抜けな返事を誤魔化すように吹き出してしまった。

「悪い悪い。いや、本当に久しぶりなんだけど言葉が出てこなくて・・・」

須藤<sup>すどう</sup> 遥人は、高校の始め頃、席が前後に並んでいたこと、空が好きだと言うことで意気投合した親友だ。

「お前つてヤツは・・・まあいいか、それよりいつ帰ってきたんだ？」  
「あー、国自体には半年前くらいには帰ってきてただけだけど、こっちは四日前・・・だな。」

四日は四日でも「激動の」と形容詞が付いて良いような数日だった。

「つい最近だな。パイロットになったんだっけか。」

遥人には出発の前に連絡を入れていた。とは言え当時は携帯の類いを持っていなかったからそれきりだったが。

「そうだな、傭兵のパイロットだ。そっちは？」

あちらの進路は大方分かっているが、詳細までは知らない。

「今は院で修士課程だ。碌哉、傭兵なら飛竜と戦うことあるだろう？」

「ああ、ある。」

「その研究とかしてるから、何か面白い行動とか見かけたら教えてくれよ。」

面白い行動とは言うが、さつき買った本を見る限り飛竜についてはあらかた研究され尽くしているんじゃないかという気がする。

「面白いつて言われても俺には分かんねえから、不思議な動きをしてるのを見たら連絡することにするよ。」

そうすれば、既に研究されていることであつてもこちらとしては戦闘技術を学ぶ機会になる。

「分かった。じゃ、連絡先くれよ。お前あの頃携帯持ってなかったからこの数年連絡も出来なかったし。」

「ああ、そうだな。」

当時は遊びの計画を立てるにも、固定電話以外に連絡手段がなくて苦労したのだという話をしながら携帯を取り出す。正直、遥人とはいくら話しても話題が尽きない。おまけになまじ二人とも興味の範囲が広いために、話の内容が迷子になるのも珍しくない。

「ロッキー、お待たせー。て、あれ友達？」

そんなことで遥人と盛り上がっていると、飛鳥が戻ってきた。

「そうだよ、同級生の遥人。」

飛鳥に紹介しつつ振り返ると、硬直した遥人の姿が目に入った。

「禄弥・・・お前、まさか・・・」

反応からして勘違いをしているのがはつきり分かった。

「いや、高校の時にも話したろ？居候先の娘さん。」

実際当時はそんな言い方ではなく妹の様な存在がいる、と話していたが、遥人は言わずともそれととつてくれたようだ。

「あー、あの・・・え、大きくない？あの時中学生って言ってなかった？」

「まあ、俺も今年受験だって聞いたときはちよつとびっくりしたけど、四年経ってるからな。」

一年でも変わる人は大きく変わる。四年もあれば尚更だ。

「そうか・・・いや、何か妹的って言うてるから小さいって言うか、幼いってイメージ持ってたわ。申し訳ない。」

遥人はそんなことを言って飛鳥に頭を下げ始める。まあ実際会ったことのない人間に対するイメージならそんなものだろう。得てして声や噂から想像する姿とは一致しないものだ。

「いやいや、気にしないでください。まだまだロッキーに甘えてるの  
で、小さいって言ったら小さいですし。」

慌てたように飛鳥が顔を上げさせる。ほんの少しだが、飛鳥が外でどう振る舞っているか垣間見た気がする。

「あー、まあ禄哉、あんまり邪魔するのも何だから俺は撤収するわ。ん

「じゃ、また連絡するー。」

そう言うと、遥人はいつもの調子に戻って退散していった。なかなか頼もしい友人とのパイプと取り戻せたのは幸運だったと言えるだろう。

「わー、ロッキーの友達らしい友達ってかなり久しぶりに見た気がする。」

見送って飛鳥がぼそつとそんなことを言った。それじゃ俺が随分寂しい人みたいじゃないか。

「家に呼ぶわけに行かなかったから目にする機会がなかっただけで、ちゃんと友達はいたからな？」

「ふーん？」

白々しい目で見られた。実際過去形だし、今は付き合いが絶えているので抗議のしようもないが。

「ま、何だって良いけどねー。それより、帰る前にコーヒー屋さん寄っていいこ？冷たい飲み物欲しくて。」

時刻は午後三時過ぎ。コーヒー屋と言うのは若者に人気のある大手チェーンか。あそこなら焼き菓子の類も置いてるし、昼食が控えめだったからおやつがてらちようど良いだろう。

「ああ、良いな。持ち帰りにするか？それとも店の中で飲み食いする？」

「うーん、ドーナツも食べたいし、持ち帰りはなしで。」

気分は同じだったようだ。

「じゃ、俺も久々デザートもの頼もつかな。」

かくして、甘味を求めて階下へ向かうことになった。

「ロッキー、明日は普通にお仕事だよね？」

飛鳥がストローを半ばくわえたままそんなことを聞いた。行儀が悪いと思ったが、休みが終わり掛けたときの憂鬱モードに入っているようだからそれについて突っ込むのは控えた。

「そうだな。性能試験も済んだし、明日から訓練飛行がメインになってくるな。」



なんなら行程が組まれ次第、スクランブル待機も入ってくるがそれは言っても伝わるまい。

「そうだよー・・・」

はあー、とため息のように大きく息を吐いて、机に突っ伏した。

「なんだ、随分元気がなくなつたな。終わつてない宿題でもあるのか？」

冷やかすつもりで言ってみたら、ビクツと微かに体を震わせた。まあ俺としては、さもありませんという感じではあるが。

「ま、焦ると切羽詰まつてくるし、一休みして帰ってからゆったりやるかね。大丈夫、高校までは遅れても平気平気。」

おどけて言うのとジトツと睨まれた。遅れるのも嫌なら早い内にやっときなさいよ。

「そりゃ遅れて出すと先生やらうるさいかも知れないけど、出さなくてそのうち先生が諦めたって奴でも卒業して普通に大学行つてる何てこともあるからさ。それならやつてることの意味が分かんないややる意味ないじゃん？」

かなり説教くさいなと思うが、後半など高校時代に勉強やら課題やらをしなかった奴が繰り返していた言い訳だ。自分で言つてて課題をやらせたいのかやらせたくないのか分からなくなつてくる。

いや、要するに遅れても良いからちやんと考えてやれということなんだが。

「そうなんだけどさあ・・・面倒くさいものは面倒くさいじゃん？数学とか」

「まあ、そうだな。俺も前日の深夜とか授業始まる前に答えざつと写しておしまいつてな具合だったし。意味考えてやれとかどの口が。」

物理とその法則に関わる方程式だとかいったものにはある程度熱心に取り組んだが、大量に問題を解かなければならないような課題に対してはおぎなりになっていた。

「はー、数学とか何でやらなきゃいけないんだろ・・・。私、理系方面じゃないし使わないんだけど。」

「そうは言つても、知つておいて損なことじゃないよ？文系でも統計

とるっていう可能性がないわけじゃないし、辛うじてでも知識があれば出来る仕事は増えるわけだし。・・・俺が戦闘機扱う上で普段数学使ってるからそう思うだけかも知れないけど。」

例えば編隊を組むときも、相手の翼の角度、高度等から自機が付くべき位置を割り出しているから数学的な考えが必要になる。それに加えて飛行時の風の影響、兵装の使用時に機体の運動から受ける影響・・・。

いつでもそれを考えているかと聞かれれば、最近の機体は大体コンピュータがやってくれるから、そんなことばかり考える必要はないのだが、かと言ってコンピュータに頼りきりで何でも出来るわけでもない。

ちゃんと知識を持っておかなければ、パイロットとしては成り立たないのだ。

「うー、耳が痛い・・・」

年上のアドバイスのように言っただけだが、さすがに理系の両親なだけあってそんなことぐらいは聞かせていたか。

「俺としてはそつちに進む気がないなら知識程度に持つとけば良いんじゃない？って感じだな。教科書見ながら解ければ上等なんだから。教科書の見方も分からないよりはさ。」

経験上、数学が出来ない人間には索引の見方が分からない人間が多いようにも思う。索引が見られるようになれば公式同士が結びついてかなり楽になると思うのだが。

「そつかあ・・・。」

まだ気の抜けたまま、カップの中の飲み物をずぞつと飲み干して呟いた。

「ま、今は堪えてがんばんなさい。勉強なら付き合うから。」

それ以上のアドバイスはない、とやや温もったコーヒを飲み干して立ち上がる。食器は使い捨てだからゴミ箱へ、トレーだけ返却する。この手の店ならライフサイクルコスト的にも衛生面の観点からも最適な方法なのだろう。

「で、他に買物ある？」

揃って店を出て、飛鳥に尋ねる。

「うーん、すっかり遊んだし、今日はもう良いかな。勉強しに帰らなきゃ。」

「そか。じゃ、帰りますかね。」

長い一週間だったから俺としても良いリフレッシュになった。明日からはまた新しい愛機とともに空の世界に帰る。出来れば稲佐の技術を間近でもっとよく見てみたいものだ。

## 第十一話：飛行制限

休み明けの空は少しぐずついでいて、どんよりと薄暗い。一雨来そうで来ない、そんな空だなと思いつながら格納庫へ歩いて行くと、稲佐も既に到着していた。

「おう、おはようさん。有名人」

稲佐は少し意地の悪い笑みを浮かべて手に持った雑誌を差し出した。

言葉の様子から気付いてはいたが、その雑誌はやはり昨日見つけた航空機のファン向けの雑誌だった。

「ああ、これですか。俺も昨日、本屋で見たんですけど記事になるの早くないですか？」

「そうだな。まあ、出版社がここからそこそこ近いし、偶に記者が出入りすることもあるから、新しい機体が出てくるって事自体は掴んでいたんだろう。俺がこの機体で乗り入れたときもそうだった。」

そう言いながら、稲佐はF-15を指した。実を言うと、F-15Mの実働機の数はかなり少ない。F-15Mは生産された全てが実戦に投入され、戦争の最中に失われるか、あるいは戦後に翼を捨てたライセンス持ち等の手で組合に返還され、解体された。

そういう意味で、F-15Mも既に珍しい機体となっているのだ。「確かに、もう希少種ですからね。今ある機体も専用部品は共食い状態でしょう？」

「そうだな・・・正直、限界は見えてる。俺だつてそろそろ引き際だしな。旋回率の低い飛竜相手ならやってやれるが、戦闘機同士の現代戦になるとお前さんが言ったとおり、コクピットでぼっくり逝きかねん。」

あれはそういう意図ではないとあのときも言ったのだが、まあ、良いか。

「そもそも、あの時代から飛び続けている人の方が少数派なのでは？」  
当時、新米であったであろう稲佐ですらこの状態だ。まして、戦争慣れしていない傭兵達が戦争を終えてなお飛び続けることなどほぼ

あり得ない。

「そりゃ、あんなものを経験すれば誰でも翼を捨てることは考えるさ。だけど、あの戦争を乗り切って飛んでる無印の傭兵達もいる。あの連中みたいにな。」

あの連中、が誰を指すのかは言われずとも分かる。例のF-104に乗ったパイロット達だ。

「じゃ、戦争を起こした側の俺たちが怖じ気づいたんで降りますって訳にはいかんだろ。何より、ああいう連中からの風よけのためにも俺たちが注目を引かないとな。」

そう言うのと稲佐は一つ伸びをした。軍より世論に近く、無印の傭兵より民衆から遠い、その不安定な場所で戦ってきた男の責任感が滲み出ていた。

「と、そうだRocke r、あの話聞いてるか？」

不意に稲佐が話題を切り替えた。その調子について行けずしばし困惑する。

「何ですか？」

「ここからずっと東に一つ大陸があるのは知ってるよな？」

ここから東、そこにあるのは衛星が飛ぶようになってからその存在を確認された未だ未知の大陸。航空機の発達期においては存在が目視できないことに加え、距離や気流、その他道中の危険から接触が敬遠され、航空機が発達した現在では、未開の民族に不用意に触れるべきではないという国際的な取り決めにより、接触がなされていない土地だ。

「ええ、ブリトリア大陸でしたよね。それが何か？」

「実はな、あの大陸に掛かっていた雲が晴れ始めているらしい。それでいて、以前思われていたより、大陸の端がこちらに近いことも分かっている。つまりな、こつちが向こうを見なくても、向こうはこつちを見てしまうかも知れない。」

少し話の先が読めてきた。

「それで、飛行区域を制限しろと？」

「よく分かっているじゃないか。とは言え、正式な指示じゃなくてな、こ

この司令の方から自粛しろと言ってきたよ。今頃、国連と傭兵組合の方はてんでこ舞いだらうよ。いつかはこうなるだらうと予測はしてただらうに。」

とは言え、対応が後手に回ることは無理からぬことだ。アラフティアでの戦争の経験から、この大陸の国々は他の大陸への対応に対して神経質になっていて、議題とすることもタブーとする空気すら漂わせていた。

「まあ、エスマリもアラフティアの一件を突かれて痛がっているようですし、及び腰になるのも分かりますけどね。」

稲佐はため息とともに、まあそうなんだがな・・・と呟き、手持ち無沙汰を嫌ってかそばにあったボールペンを弄び始めた。

「・・・アラフティアの戦争が起きたとき、エスマリの上層部でアラフティアの地理や風土や、言語について知っている者は皆無と言って良い状態だったらしい。全く知らない相手に対して、現地と現場を知らない人間達で作った交戦規定と通信帯を持って戦争をしにいったんだ。その結果はアラフティアの混乱、戦局の泥沼化、エスマリの国際地位の低下・・・。結局は前もって相手について知ろうとしなかったから、こんなことになった。で、今は？」

隣の大陸・・・ブリトリアと名付けられたその大陸とは、未だ一切の交流もないまま。だが対応を誤ればアラフティアの二の舞になりかねない。それに、

「国連からしてみれば、目の上のごぶは我々でしょう。傭兵が他の大陸との接触に対して目を光らせている・・・という印象を世界に与えているから、国連も迂闊に動けない。」

「まあ、もつともだな。組合の方も、国連に連絡して何かしらの対応を取るだらうが、さて、どうなるかな。」

国連側はあくまで協議に参加させるという方針はとりたがらないだろう。傭兵はあくまで傭兵であって、外交や政治に関わる者ではない。組合にしても政治家との密接な関わりは世論の反発を招きかねないという理由から、組合発足時以降の接触は避けている。

「すると、我々は指示待ちですか。」

単純な政治問題ならこちらに出る幕はない。我々がするべきなのはいつも通り、政治屋が利益目的のために紛争を起こさないか観察することだけだ。

「まあ、政治問題でカタがつくなら指示待ちだし、開戦の意図ありならライセンス持ちで集まって対応協議だな。とは言え、今のところそれより厄介なのは、飛行空域の設定を誤って俺たちが相手とこっちのラインを踏み越えちまうことだ。空域制限は俺たちだけじゃなくて、無印の傭兵にも適用されるからな。」

「まさか監督責任がこっちに飛んでくるなんてことはないですよね？」

通常、札付きは札付き、無印は無印で、負うべき責任は全く異なる。大抵の場合、札付きの方がより多くの責任を負うが、そこに無印の傭兵の監督は含まれていない。

こちらは国際機関に承認を得た戦闘機パイロットであるのに対して、あちらは特定の基地に所属することを条件に、民間の事業用操縦士資格を有する者に兵器の運用許可を特例として出しているだけに過ぎない。

つまりは、本来彼らの責任は彼ら本人に問うか、基地の管理者に問われなければならない。

「まあ、流石にそれはないが、気をつけなければいけないのは確かだな。何せ、無印の連中は計器類をよく見ないことが多いから。」

それは、稀ではあるが聞く話だ。兵装をつけた状態で訓練を行っていた無印の傭兵が空と相手だけを見て空戦機動を続けた結果、住宅地の近辺まで接近し、法的な処分を下されることがある。

そのために、札付きはライセンスを得るための訓練を行う際に地面、ないしは海面を見て飛ぶことを教えられる。戦闘時に回避機動に应用できるだけでなく、周囲に目を配る癖をつけることで、事故率を減らすのだ。

「たとえば事故にならなくてもおまわりさんに怒られますから、彼らも気をつけるとは思いますが。」

「怒られる、ですむ話じゃないがな。」

あまり物騒な言い回しをするものでもないと思って敢えて軽く言ったことに気付いて、稲佐も苦笑交じりにそう言った。

「ま、ともかく飛行禁止区域には気をつけろってことだから、その書類確認しといてくれ。その間飛行計画ちよつと練り直す。」

どうやら、飛行禁止区域の設定に伴って元々立っていた飛行計画があたりを食ったらしい。稲佐は頭を少し乱雑に掻きながら併設された事務室に引っ込んでいった。それを見送って、おいて行かれた資料を手に取る。

「あらら、高度制限までつくのかよ・・・。」

そこに記されていたのは飛行禁止区域の設定と、相手の飛竜が到達可能と考えられる高度での活動を禁止する旨。

それを見る限り、雲の上まで上がっていくか、雲のスレスレまで降りていくか、というところのようだ。と、なると、おそらくは高高度での訓練がメインになるだろう。

「やれやれだな・・・。」

休み明けの空は、幾ばくかの波乱の色をにじませていた。